

レーム帝国で生きていく

ルクセウス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

数えきれない出会いと別れ、既知なる世界に隠された（既に答えを知っている）謎…

不思議な青年による、剣と秘宝の大冒険がここから始まる!!？

爽快フィジカルアドベンチャー!!？

※至らない点や誤字脱字、言葉の誤用、設定の矛盾などがあれば教えてください。と助かります。

※作者は現在男子高校生なのでテストや行事などで投稿できない日が続く可能性があります。

※作者は本編の方は全て持っていますが、シンドバッドの冒険は途中までしか持っています。なので、もしかしたらシンドバッドの方とは違う設定が出てくるかもしれません。そこはオリジナルってことで勘弁してください。まあ、本編の方の設定も改変するんですけどね！

# 目次

プロローグ

第1話 1

第2話 4

第3話 7

第4話 10

第5話 14

第6話 17

第7話 21

本編

第8話 24

設定集（なお、本編に関わるとは言っていない） 27

第9話 29

第10話 32

第11話 35

第12話 37

第13話 40

第14話 42

第15話 44

第16話 47

第17話 49

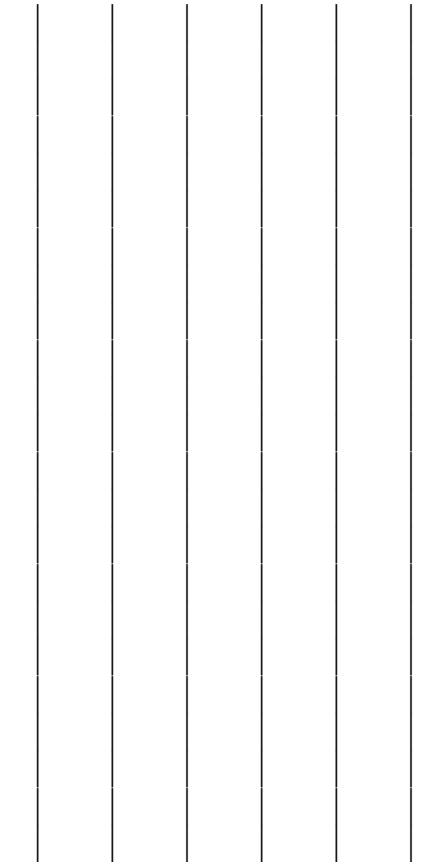
第18話 51

第19話 54

第20話 57

第21話 60

第27話  
第26話  
第25話  
第24話  
第23話  
第22話



76 73 70 67 64 62

# プロローグ

## 第1話

やあ。僕はユリウス。転生者さ。

え？「なんで転生者だつてわかってるのか」だつて？

そんなの神様転生したからに決まっているじゃないか。

なんでも、成人前に死んだ人に、特典をつけて別の世界に転生させてるんだとか。で、その特典っていうのは、転生する世界の生きやすさだとかそういうので増減する（自分で選べるかも含まれる）んだつて。俺が転生する世界は、『マギ』の世界、転生特典はそれなりに多い方らしい。ラッキーだね。俺、マギ結構好きだったし。ちなみに、俺が1番好きなキャラはシエヘラザード様です。18巻第177夜の笑顔にやられました。尊すぎるんだよお！

あつ、俺がもらった特典は

- ・ 金属器をかなり上手く扱えるようにする（魔力<sup>マゴイ</sup>なども含む）
- ・ 最初に産まれる年代は、マギ『シエヘラザード』が生きている時にする

- ・ 転生後に死んだ時、マギシステムがある間はマギの世界で記憶や特典を持ったまま転生できるようにする

- ・ その時、必ずレームの首都で産まれるようにする

- ・ 言語の自動翻訳

というものだ。かなりギリギリだったけど、1つ目の特典がまず金属器を手に入れなければどうにもならないのと、転生に期限を設けたことで、なんとかなった。

まあ、そんな感じで産まれたんだけど、見た感じかなり高貴な家っぽい。なんかシャンデリアみたいなのがある。…落ちてきそうで、怖いなあ。

俺、ユリウス、10歳！

この10年でわかったこと！

- ・ 名字はアレキウス
- ・ 両親は俺のことを道具としてしか見ていない
- ・ この国既に腐ってる
- ・ 現在この国にはシエヘラザード様もティトスクンもない
- ・ 政治の勉強難ちい！
- ・ 剣の稽古楽ちい！

ってくらいかな！いやーもう嫌になっちゃうよね！  
ってことで家でした。こっちは5年くらい前から脱走計画を立ててんだよ！ハハハ！

あつ、家出た後のこと考えてなかった…どうしよ…  
とりあえずここから離れよ！

あつれえ？なんで俺は森の中におお？おかしいなあ、ただ走ってただけなんだけどなあ…

つとあそこに人影が！とりあえずここがどこか聞いてみよう！  
つて、あれはシエヘラザード様!?？なんかちつさいけど！えつえつ  
どうしよう…

「そこにいるのは誰？」

き、気づかれたッ！

「えつと、ユリウス・アレキウスです！」

「そう、ユリウスはどうしてここに？」

「えーと、その、家出して、何も考えずに家から離れようとしてたら、  
いつの間にかここに…」

「ダメよ、家出なんかしちや。家の人、きつと心配しているわ」

「…確かにしているかもね。でも、それは俺のことをじゃない。政治の道具が無くなることをだ。要するに、俺のことを愛してなんかいないんだ。俺だけじゃない。この国の貴族はみんなそうさ、自分の子供を道具としてしか見ていない。それに、その子どものみんなは貼り付けたような笑顔でしか笑わないのさ。そんな俺は嫌だ。絶対に変えてやる。…て言っても、今の俺にはそんな力はないから、どうにもできないんだけどね」

「そう…なら、5年経つてもまだその気持ちが変わらなかつたら、ここに来ると良いわ」

「えっ? まあ、わかつたけど、どうして…」

「ふふ、あなたのことが気に入ったからよ」

「…ありがとう?」

「どういたしまして。あと、戻る気があるのなら早くした方が良いわ。次に家出するとき、警備が厳しくなっちゃうわよ?」

「あつ、それもそうだね。じゃあ、またね!」

「ええ、またね」

はあ、シエヘラザード様めっちゃかわいいんですけど。というか、さつき言ってた5年後のやつって金属器かな? それなら、それまでの5年は身体と剣の腕を鍛えるの頑張ろ。じゃなきゃ死んじやうしね!

## 第2話

俺ユリウス、15歳!

この5年でだいぶ強くなったと思います! 剣の先生にだいぶ安定して勝てるようになったし!

ということ、脱走じゃあ!

まずは監視役の人を気絶させて、次に窓から外に出て、あとは塀をこえる、これで完了! あとは、シエヘラザード様がいた場所に: 場所に:

どこだよ!? 前は適当に走って行ってついたからわかんねえよ!!  
? じゃあない、とりあえず走るか!

な、なんとかついた:

まさかあんなに走ることになるとは:

と、とりあえず話しかけるか

「久しぶりだね! エーと、あれ? そういえば君なんて名前だっけ?」

「ふふ、本当に来てくれたのね。良いわ、教えてあげる。私はシエヘラザード、マギと呼ばれる存在よ!」

「マギって?」

「王にふさわしいと思った人に力を与える者達のこと。世界で3人しかいないわ!」

「えーと、力って?」

「見せた方が早いわね。えい!」

彼女がそんな掛け声とともに杖を振ると、城のようなものが出てきた。それは全て金ピカに光っていた。趣味悪いな

「これはダンジョン。これを攻略することで、力が手に入るわ。よかったわね、

この第3<sup>ダ</sup>5迷宮『マルコシアス』にはかなり強い力が眠っているわ!」

「これを攻略すれば力が: どうすれば中に入れる?」



「あの光の幕みたいなのに触れれば良いのよ。じゃあ行くわよ！」

「え？シエヘラザードも来るの？てか、テンション高くない？」

「その、私も入るのは初めてなのよ。悪い？」

「いや、そんなことないさ！じゃあ、行くぞー！」

「おー!!？」

「そーいや、なんか誤魔化された気がする…」

「ああ、これがダンジョンに入るたび描写されていた  
黒い地面と赤い雲か…キレイだ」

「ハッ!?？」

「やつと起きたわね。気分はどう？大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。それよりも、ここがダンジョン…?」

「そうみたいね。とりあえず進んでみましょう」

「ああ、そうだな」

進んだ先には、自然の美しさの極致表したかのような景色が待っていた。木々が生い茂り、太陽が照りつけ、川がその光を反射している。

そして、その中心には、人狼という言葉が似合うものが立っていた。

「やあ、私は誠実と裁定の『ジン』マルコシアス。貴様はなぜ、私のダンジョンに？」

「誠実？つまり、嘘をつくなどということか…」

「革命に必要な力を手に入れるためだ」

「革命？貴様はなぜ革命をしようとする？」

「そうだな…誰も本当に笑うことがない、そんな世の中が嫌だからだ」

「ふむ…では、力を手に入れたとして、どうやって革命をする？国の上層部を全て殺すか？」

「下のは読まなくても大丈夫です」

「それをするのは最終手段だ。大きな力というものはそれだけで旗印

となる。それが特別な力なら、なおさらな。そんな（本当に国を変えてくれるかもしれない）力を持ったものが呼びかければ、本当に国を変えたいと思っっている者達は、立ち上がってくれるはずだ。そんな風になれば、周りに流されるやつも立ち上がる。そうして、人数が増えれば協調圧力に負けたやつらも立ち上がる。そうやって、人が増えていけば、影響力が出てくる。：まあ、こんなものただの理想だがな。実際、こうも上手く行くとは思えない。ほぼ確実にどこかで失敗するな。だが、力があればなんとかできる。人を守るのも、傷つけないように倒すのも、殺すのも。

だから力をくれ！マルコシアス！」

へへへまで

「ほう…まさか正直にすべて話すとはな…」

「まあ、誠実と裁定のジンって言ってたからな。正直に話した方がいいかなって」

「ふふ、まさかそんな理由で本当にすべて正直に話すものがあるか！気に入った！貴様を我が主と認めよう！」

「ありがとう！嬉しいよ！」

「よかったわね、ユリウス」

「ああ、シエヘラザード」

「では、この先へ進め。そうすれば扉がある。その扉の先に私の本体がいる。そこで力が貰えるだろう。ではな」

「ああ、じゃあな」

そんな感じで力を貰った。なんていうか、もつとこう冒険的なのを求めてただけだなあ。ベリアル形式かあ。まあ、力も貰えたしいつか。

### 第3話

うっ…俺はダンジョンを攻略できた…のか？

っと、シエヘラザードは…いたな。グツスリ眠っているな。とりあえず、自分で起きるまでは放っておくか。

で、マルコシアスがくれた力つて言うのは…うわっ、なんだこれ!!  
?…使い方が…わかる?あっ、転生特典か…

とりあえず試してみるか。えーと、魔法陣的なのは…あ、師匠(剣の先生)に初めて勝った時に貰った剣(サーベル的なの)にあるな。『力を貸してくれマルコシアス!』

その言葉と同時に炎を纏った氷柱が現れる。クツ、厨二の血が!  
こ、今度は同じ言葉を念じてみると、同じく炎を纏った氷柱が現れた。

次は、鋭利な刃をイメージして念じてみるも、刃のような形になっただけで、そこまで鋭利なわけではなかった。

次は、もつとしっかりとしたイメージを持ってやってみる。今度は成功した。

つまり、イメージが具体的であれば成功するということか？

今度は、剣をしっかりと見ながらそれを作ると念じてみると成功した。

なるほど…次は武器化魔装をしてみるか。

炎を纏った氷柱を発生させ、剣に纏わせて凝縮していく。だが、なかなか上手くいかない。これもイメージが大切なのかな?武器化魔装のイメージってなんだよ。魔装後の武器でもイメージすればいいの?

まあ、とりあえずやってみるか。って言っても、魔装後の武器がまったくわかんないんですけどね。マルコシアスが持ってた武器になりそうなもの…爪か?よし、やってみるか。

爪…爪…爪…っと、できたあ!

これは…炎を纏った氷の爪?そのままやんけえ!いやでも、剣が無くなってるから成功…なのか?

(ユリウスよ…聞こえるか?)

この声は…

(私だ、マルコシアスだ。それが私の武器、『ラハープ・ジャリド・マクハラフ炎と氷の爪』。敵の欺瞞を凍らせ、燃やす。つまり、敵が嘘をついていればいるほど効果のある武器だ。逆に、相手が正直者であれば、あまり効果がない。だが、貴様が今から相手にするのは腐った国の上層部なのだろう?ならば問題ないだろう)

それもそうか。それにしても、かなり尖った性能だな…まあ、良いけどさ!一極型ってロマンだよな!

「ユリウス?何をしているの?」

「ん?ああ、シエヘラザードか。マルコシアスから貰った力の確認をしてるんだよ」

「そう、上手くいつてる?」

「そこそこね」

「それは良かったわ」

「あつ、シエヘラザード、見ててなんか改善案があったりしたら教えてくれよ!」

「仕方ないわね。何もすることがないし、特別に手伝ってあげるわ」

「ありがとう!」

よし、次は全身魔装の…

ダンジョンを攻略して、1週間がたった。

この1週間で、金属器をかなり上手く使えるようになった。マルコシアスの能力は、氷柱を意識せずとも自然と形にできるようになったし、魔装も一瞬でできるようになった。それに、魔装した状態で飛び回ったり、その状態で能力を使えるようになったしな。

あとは、シエヘラザードともたくさん話をした。その中で、「シエヘラザードって呼ぶには長いよな」ってなって、愛称をつけることになったりもした。まあ、あんま良いのが思い浮かばず、とりあえずシエーラになったのだが。

そんなことがあつたりもしたが、ついに今日は革命を起こす日だ。もう少し特訓しても良いとは思うのだが、そんなことを言つていたら、それを言い訳にして革命を起こさない気がする。正直、革命を起こすのは怖い。だけど、これは誰かがやらなくちゃいけないんだ。だから、俺達は今日革命を起こす。

俺達はレーム帝国の首都レマーノの南広場に来ていた。ここからならレーム宮殿（城的なやつ）が見えるし、そこまでまっすぐと大きな道が通っている。ここでなら、効果的に革命を進められるだろう。まずは、シエーラに声をレマーノ全域に届くようにする魔法と、俺の声に共感しやすくする魔法をかけてもらう。

『レマーノに住むみんな!!?俺の話聞いてくれ!!?』

俺は元老院の第一席、アレキウス家の長子、ユリウス・アレキウス!!?』

俺は今日ここで!!?神より与えられた力を使い!!?この国を変える!!?』

真にこの国を変えたいと願うものは俺に続け!!?』

「誠実と裁定の精霊よ。汝に命ず。我が身に纏え我が身に宿れ。我が身を大いなる魔神と化せ：マルコシアス!!?」

その言葉と共に俺は巨大な氷柱を宮殿の方に向け発生させる。

『我が力は欺瞞を凍らせ、焼却する!!?貴様らが生き残れるとは思わないことだ!!?』

## 第4話

『革命はここに成った!!?俺たちが国を変えたんだ!!?これからこの国は、みんなが本当に笑えるような国になる!!?いや、違うか…みんなでそんな国を作っていくんだ!!?』

シエーラに魔法を使ってもらい、国民達に革命を成功したことを伝える。やはり多少の犠牲は出てしまったし、最終的に貴族や皇帝は殺さなければならなかった。しかし、これでこの国はきつと良い方へ向かってくれる。これで俺の役目は終わりだ。あとは將軍くらいの地位に落ち着いて…

「あなたまさか將軍くらいの地位になろうなんて考えてないでしょうね?」

「え?シエーラ、ダメかな?」

「ダメに決まってるでしょ!もうみんな、あなたが皇帝になると思ってるわよ!私もちやんと支えてあげるから、ちゃんと皇帝になりなさい!」

「マジかあ…」

マジかあ…

そういうわけで、皇帝になった。

—1年目—

ああ、クツソ忙しいなあ!なんでこんなに問題があるんだよ!貴族ども不正しすぎだろ!最近では、マルコシアスの能力まで使って偽装を見破って時間短縮してんの!てか、1年かけてやっと半分も終わってないっておかしくない!??もういやあ…

—2年目—

もうやだあ!なんか問題増えてるう!なんでパルテビアさん攻めてくるのお!とりあえず増援送って…ああ、クツソ!俺の金属器がどんなやつにでも一定の効果があるのだったら、速攻で行って、速攻で殲滅してくるのにい!

—3年目—

や、やつとパルテビアとの戦争が終わった…それ以外の問題も8割方終わったし…あとは、部下の使い方もわかってきた…これで効率が悪くなったぞお。

—4年目—

シゴトスルタノシイ。シゴトフェルウレシイ。シゴトスルタノシイ。シゴト、シゴトシゴトシゴトシゴトシゴトシゴト…

「ユリウス、気晴らしにダンジョン攻略に行きましょう。働きづめ良くないわ」

「ゴトシゴト…ユリウス?…ハッ!?俺は今までいったい何を…確かあれは、9割くらい終わったところでさらに隠れてた問題が…ウツ。そ、そうだな。ダンジョンに行こう。そうしよう。それが良い。うん」

「ええ、そうするべきだわ（ダンジョンによつては数時間潜っただけで、外では数ヶ月過ぎてるものもあるってことは黙っとこ）」

—近場の森—

「ここら辺で良いわね。じゃあ、えい!」

その掛け声と共に、黄金に輝く宮殿が出てきた。…そういえば、これって金でできてんのかな?これを取って売れば、財政も楽に…

「それはやめた方がいいわ。これは金色に光っているだけで、本当に金なわけじゃないし、そもそもダンジョンを攻略したら消えちゃうんだから。もしそんなものを外国に売った日には、レームの信用は地に堕ちるわ」

「それもそうか。というか、なんで思っていることがわかるの?声に出ってた?」

「だって、これでも4年間ずっと一緒にいたのよ?顔を見れば、何を考えてるかくらいわかるわよ」

「そっか!それで、このダンジョンには、どんなジンが眠っているんだ

？」

「ここは…第26迷宮『ビム』ね。ここにはそこそこ強い力が眠っているみたいね」

「そうか。まあ、とりあえず行くぞ！」

「オー！」

あつ、またこれか。アルマトランって話だけど、塔みたいなのあったりしないかな？って見えるわけないか。

ハッ！ここは…

「やっと目を覚ましたのね。というかあなた、前も起きるの私よりも遅かったよね」

「そうだね。なんでだろう？」

「さあ？私もわからないわ。それよりも早く先へ進みましょう」

「それもそうだな。じゃあ行くか！」

クツサ！何これマジクツサ！これは…腐敗臭？ってあれは死体か？あ、あそこにも。なんか動きそうだな…

「とりあえず、警戒しながら進もう。もしかしたら、あの死体が動き始めるかもしれないし、地面から出てくる可能性もある。あ、シエーラ。魔法であの死体を燃やせたりするか？」

「できるわよ、それくらい」

『灼熱』

「あ、あと、臭いを誤魔化す魔法とかあってない？」

「そんな魔法はないことはないけど、風を起こして臭いを飛ばすだけじゃダメ？」

「いや、全然それでいいよ！お願い、それ早く使って」

「仕方ないわね、『突風』」

あ、だいぶマシになった…

てか、アモンとかザガンみたいな感じっぽいな。ということは、ここは探索系？



よし！攻略じゃあ！

## 第5話

やっぱ動きやがったよこいつらあ！

半分くらい燃やしたところで動き始めやがった。ていうかウザいなこいつら。切つても普通に動くし、なんか臭い汁みたいな飛んでくるし！個体によっては内臓とか飛び出でて見たくないし！それに数も多い！

3K（臭い・キモい・数が多い）だよ！1番戦いたくない敵だよ！

ああ、うぜえ！

つと、よし、上はそれなりの高さがあるな！

「シエーラー！掴まれ！上から抜けるぞー！」

その掛け声と共に全身魔装をし、シエーラーの手を掴む。そしてそのままゾンビどもの上を通り抜けて行く。

「よしよし、上手く行ってるな」

「そ、それよりもその、これって…（お姫様抱っこされてる）」

「ん？ああ、ごめんな。でもこれが1番安定するんだ。我慢してくれ」

「いえ、別に嫌ってわけではないのだけれど…つて前！前見て！」

「え？うわあああ!?？ざっけんなよ！なんで天井からも落ちてくるんだよ！…チツ、しゃーない。シエーラー！しっかり掴まってるよ。さらに加速するから！」

「…ハアハア、ゾンビどもはもう追つてこないのか？なんか、地面も土みたいなからレンガに変わってるし、それも関係してるのかな？」

「そうみたいね。…あっ！あそこに何か書いてあるわよ」

「おつ、本当だ。えーと、なにになに？『汝の強さを示せ 悪霊を全て成仏させし時 おのずと道は開かれる』？…え？あいつら全部倒せってことっ…」

「というよりもあなた、この文字が読めるの？」

「えっ、あ、ああ、小さい頃に勉強の一環として習ってな」

「そう。私に隠し事をするのは少し気に入らないけど、今は許してあ

げるわ」

「…ごめんな。俺が皇帝をやめる時くらいになったら話すからさ。それまで、かなり待たせちゃうかもしれないけど、待つてくれないか?」

「仕方ないわね。あなたに言う覚悟ができるまで、待つてあげるわ」

「ありがとな」

「で、これどうするのよ。現実逃避もいいけど、そろそろ考えましょ」

「もうちよつと逃げてちやダメ?」

「ダメ」

「そう…やつぱちまちまと削つてくしかないかなあ」

「まあ、それしかないわね。じゃあ、頑張りましょ!」

「ああ! そうだな!」

— 1 時間後 —

全然減らねえ! ちよつとこいつら数多すぎじゃない! というか、俺が有効な攻撃を放てないのが辛い! 切るだけじゃ死なないし、死体だから嘘なんてつかないからマルコシアスも使えないし! クツソオ、とりあえずだるまにして、あと、腕だけで動かれたりしてもキモいから、関節も切つとくか。大丈夫大丈夫、4年間働き続けるのに比べれば余裕余裕。

— 3 時間後 —

8割くらい燃やしたかな? やつと目に見えて減つてきたよ。流石にちよつと疲れてきた…

— 4 時間後 —

やつと全部倒しきれた。…おかわりきたりしないよね?

つてあれ? 入り口の方に道ができてる?

「これは…どういうことだ?」

「おそらく地面の中にいたゾンビがいなくなったことで、地面が低くなったよね。ほら、あっちを見て。さっきの文字が書いてあったと

ころが高くなっているわ」

「あ、本当だ。ということとは、あっちに進めば良いのかな？」

「そうなのでしょいうね。できれば、もうゾンビは出てこないでほしいわ」

「まっただ」

今できた道を進むと、そこには大きな扉があった。それには、まるで押してくださいとでも言うような手形のようなものが2つあったが、両方とも右手のものだった。…ミスかな？いや、みんなで協力しろ的な感じなのはわかってるよ？でもさ、もし1人で迷い込んだりした人はどうしろって言うんですかね？諦めろ？

…まあ、俺たちは2人いるから良いんですけどね？

「シエーラ、これってどうやって開けるかわかる？」

「えーと、あ、マジとしての知識の中にあるわね。その手形に手を合わせた状態で、『開けゴマ』と言えば良いみたいね」

「そ、そうか。じゃあ、やるか！」

「せーの！」

「開けゴマー！」

## 第6話

扉を開けた先には、街があった。

「これは…街!?？」

「いや、何初めて見たような反応しているのよ。マルコシアスの時も見たじゃない」

「いやー、それもそうなんだけどさ。やっぱこういうのはやつとかなきゃかなって」

「ちよつと何言ってるのかわからないわ」

「んー残念。というか、こういうの見ちやうと探検してみたくならないう？」

「…なりはするわ。でも、攻略を始めてもう5時間も経っているわ。ここで、探検を始めちゃうと、たぶん餓死することになるわよ? あなた、食べ物持ってきていないでしょ?」

「あつ…よし! 攻略しよう!」

「ふふ、なら早く行きましょう」

「ああ!」

街の中を進んで行くと、特に何かあるわけでもなく宝物庫に着いた。

そして、その中へ入り、ジンの宿っている装飾品を探す。つとあったな。イヤリングか…とりあえず触ってみる。すると、そこから鷹のような頭を持ち、体には龍のような鱗が生えた人型のものが出てきた。

「俺は支配と雄弁のジン、ビム。まずは、おめでとうと言っておこう。よくここまで来れたものだ。あの数のゾンビと戦って生き残れるという継戦能力の高さは認めよう。だが、戦いとは長く戦えば良いというものではない。瞬間的な強さも必要だ。」

ということ、我が最強の眷属『ブニ』と戦ってもらおう。何、勝負必要はない。俺に認められる戦いをすればいいのだ」

その言葉と同時にブニ(と思われるもの)が召喚される。それは、ド

ラゴンが白骨化したもののように、ゲームなどではスカルドラゴンとも呼ばれていそうな姿をしていた。

「では、はじ「ちよっと待ってくれ！」

「なんだ？」

「とりあえず、シエーラは安全なところに行かせてやってくれないか？強さを測るんだろ？なら、1人でやらなきゃ意味ないじゃないか」

「ちよ、ちよっとーあんなのと1人で戦うつもりなの!!？正気!!？」

「正気さ。たまには、俺1人の力で戦ってみたいんだ。…それに、シエーラに傷ついてほしくないしな」

「もう…」

「それで、ビム、ダメか？」

「…いいだろう。少し時間をやる。そのうちに離れると良い」

「よし、十分離れたな。では、もう何も無いな？」

「ああ、準備はもうできてるよ」

「では、始め！」

その言葉と同時に、巨大な尻尾が俺に迫ってくる。俺はそれを紙一重でかわし、ブニへと接近していく。もちろん、手などを使って迎撃してくるが、ギリギリでそれを避けていく。って危ねえ！なんでお前中身スツカスカなのに毒のブレスみたいなのはけるんだよ!!？魔法か!!？魔法だな（納得）

そんなことがありつつも、なんとか近づいた俺は、ヤツの腕に攻撃を叩き込む。とりあえず、一本でも折っちまえばあとはこっちのモンだ。って硬ってえ！え？なにこれ硬すぎない!!？カルシウム取りすぎじゃない!!？あ、魔法か…

これは…どうすれば良いんですかね？俺、これ以上の攻撃力を持ったもの持ってないよ？マルコシアスだってこういうのの相手をするのは苦手だし…

まあ、とりあえず攻撃に当たらないように立ち回って、隙があれば殴ってくか！

っと、右手の振り下ろしか！避け…ってあいつ学びやがった!!？ギリギリで角度変えてきやがった！クソツ！これは避けきれねえ！ツ

!!?

やるじゃねえか、この骨野郎。結構痛かったぞ。まあ、こういうこともやってくるってわかってんならやりようはある。大丈夫だ…ああ、大丈夫大丈夫。俺ならやれるさ。ていうかイラついたからね。腕の一本くらいへし折ってやらないと気が済まないね。

来たなツ！今度は左手での薙ぎ払いか。とりあえずバックステツプ。っと避けた俺を狙って突いてきたな。なら、まずは横に避ける。あ、無理して突いてきたから体勢を崩したな。チャンス！まずは腕をつたつてヤツの背骨に登る！あとは斬りまくる！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！…あ、こいつもう死んでたわ。うん、骨になって動いてるヤツを生きるとは言いたくないね。

「そこまで、もう十分だろう。貴様の強さはよくわかった。貴様を主と認めよう。ん？俺が入れる金属がないではないか。チツ、仕方ない。俺が宿っていたイヤリングを使うと良い。本当は、長年使っていたものとかの方がいいのだから」

「ああ、ありがとう」

「ユリウス！大丈夫だった!?？一回思いっきり当たってたけど…」

「大丈夫だよ、シエーラ」

「なら良いのだけど…」

「よし！帰るか！」

「…そうね。でも、念のため1週間は激しい運動をしないこと！」

「ああ、わかったよ」

「…あ、ここにあるお宝って持って帰っていい？」

「いいぞ」

「よっしゃあ！これで財政問題が多少はマシになる！…あ、帰ったら仕事…」

つと、今回も無事に近くに出れたな。

「じゃあ、帰るか！」

「ええ、お仕事が待っているわ！」  
「あー聞きたくない聞きたくない！」



## 第7話

「なあシエーラ、1つ言いたいことがあるんだ」

「なに？ユリウス」

「みんな俺を働かせてすぎじゃない!?？なんでこんなヨボヨボになるまで働かされたの!?？おかしくない!?？」

「いやだって、それはあなたがなかなか次の皇帝を決めなかったからじゃない」

「だってさあ！何故か皇帝なのに婚約とかそういうのもなかったから、子どもを作るなんてこともなかったし！どっかから養子を作っても絶対不満が出るし！どうしろって言うんだよ!?？」

「で私を皇帝代理兼最高司祭にした、と」

「そりゃあ、次を任せられるのはシエーラくらいしかいなかったからね。シエーラのこと、信用してるし」

「ならもっと早く決めればよかったじゃない」

「いやー、シエーラのためにも出来るだけ仕事を減らしとこうと思つて…」

「そういうところよ。もう少し人を頼りなさい」

「ハハ、次があつたら気をつけるよ。そういえば昔、ダンジョン攻略の時に皇帝を辞めたら話すつて言ったことがあつたよな」

「そんなこともあつたわね。何？話してくれるの？」

「ああ、皇帝を辞めてから少し経っちゃったけど、丁度いい機会だからな。：信じてもらえないかもしれないけど、俺にはさ、実は前世の記憶があるんだ。まあ、もう（マギの原作のこと以外）ほとんど覚えてないけどな」

「ふーん、そうだったの」

「あれ？反応薄くない？結構言うの緊張したんだよ？」

「だって、ユリウスはユリウスじゃない。たとえ前世の記憶があつたとしても、私にとつては、それを含めてユリウスなのよ？」

「：ありがとな。そう言ってくれることも、今まで支えてくれたことも」

「ふふ、当たり前前じゃない。あなたは私にとって特別な初めて選んだ人なのよ」

「本当にありがとな。…まあ、なんでこんな話をしたのかって言うとき、もしかしたら次も今世の記憶があるかもしれないからさ。もしよければ、待っていてくれないかな?」

「良いわよ、待っていてあげる。あなたが帰ってくるまで、この国を守ってあげる」

「ありがとな。…さつきから俺、ありがとうしか言っていないな」

「ふふ、そうね合言葉を決めましょう。もし姿が変わっていてもそれならわかるでしょ。そうね…『開けゴマ』なんてどうかしら?」

「ハハッ! いいな、それ! ああ、もし来世も会うことができたら、その言葉を言うよ。まあ、来世は皇帝とか貴族とかはもう勘弁だけだな。…そろそろみたいだ」

「そう…もう行ってしまおうのね」

「そんな顔をするなよ。また会えるさ。またな、シエーラ…」

「またね、ユリウス…」

「ああ……………愛して……………いる…よ……………シエーラ…」

ああ、これが死ぬってことか…

…ハ!?? 赤ちゃんプレイ!?? いやもうちよつと余韻に浸らせて!!  
?こちとら感動的な別れをしたばっかだよ!??

ああ、これで4度目の転生か…

いやー、いろいろとあつたね! 皇帝になったり、商人になったり、職人になったり。まあ、皇帝以外はそこまで凄かったわけじゃないからシエーラには会えなかったけど…

え? 結婚したのか、だつて? してないよ? いや、シエーラのことを愛してるのに、他の人と結婚とかするわけないじゃん。それに後継

だって、商人のときは（経費削減のために）孤児とかを拾って育てて社員にしてたから、当主としての能力が1番高いやつに継がせたし、職人の時は普通に弟子に継がせたし。なんの問題もなかったからね！

まあ、そんな感じでいろいろとあつてけど、今世はどんな家に産まれたのかな？見た感じかなり高価なものが置いてあるし、まあ間違いなく貴族だとは思うけど。

……え？ムー？

## 本編

### 第8話

俺、ムー・アレキウス、10歳!

この10年で常々思ってたことと言えば、ファナリスの身体能力マジヤベエなつてことだ。なんでジャンプすると50メートルくらい跳べるの? おかしくない? 物理法則って知ってる? てか、純血のファナリスってこれ以上にヤベエのか:うん、ファナリス兵団作ろう。戦力的にもそうだけど、そんなのを奴隷として富豪とか貴族に持たせときたくないっす。

あ、あとは最近妹が産まれました。いやー、めっちゃ可愛い。具体的に言うとシェーラの次くらいに可愛い。え? それあんま褒めてない、だつて? いや、めっちゃ褒めてんじやん。シェーラはもう神だから。殿堂入りだから。俺の中で、シェーラを超える奴が出ることなんてありえないから。

そんな感じでいろいろとあつたりもしたけど、今日俺はシェーラと会うことになるらしい。なんでも、アレキウス家の者は10歳になるとシェーラに会うことになるのとか。ラツキーラツキー、ユリウス時代の俺が理由な気もするけど、それでもラツキーだね。

とりあえず、あつたらお疲れ様って言おう。うん、別に会えなくたって、シェーラの頑張りはわかったからね。あとは、ごめんとも言わなきゃね。ホントはもっと早く会いに行きたかったけど、待たせちゃったしね。

「ムー、そろそろだ。心の準備をしておけ」

「わかりました、父上」

つとそろそろだな。あー変に緊張してきた。会うの久しぶりだと思ふとなんか急にね。

「行くぞ、ムー」

「わかりました、父上」

☒コンコン☒

「失礼します、シエヘラザード様」

「失礼します」

「いらつしやい、その子があなたの言っていたムー?」

「はい、この子が我がアレキウス家の長子、ムーでございます」

「僕はムー・アレキウスです。よろしくお願いします。シエ、シエヘラザード様」

あぶねえ! 父さんがいるのにシエーラって言いかけた。てか、シエヘラザード様って言うのめっちゃ違和感あるな…

「それではシエヘラザード様、私はこれで」

「ええ、ありがとうございます」

「失礼します」

あ、父さんが出て行ったな。これは…チャンスか?

「えーと、シエヘラザード様、父上は何故出ていかれたのですか?」

「それは、私があなたと2人きりで話たいと言ったからよ」

「ということは、ここには他の人は…」

「いないわね」

「そっか…そっか…」

「どうかしたの? ムー」

「いや…その…えつと…久しぶりだな、シエーラ。確か合言葉は…『開けゴマ』だったか?」

「えっ…:…ユリウス…なの?」

「まあ、そうだな。なんていうか、ごめんな。こんなに待たせちゃつて」

「…バカ、なんでもつと早く会いに来てくれなかったのよ…私、寂しかったんだからね…」

「本当にごめんな。シエーラはデイラドー商会とロマン製の武器って知ってるか?」

「たしか130年くらい前に急成長した商会と、かなり優秀なのにとこか欠点があったりしたけど一部の将軍に人気のあった武器よね。それがなにか…つてまさか?」

「ああ、そのどつちも俺が転生したとこでさ。なんとかシエーラと会

えないかって頑張ったんだけど、流石に一般人じゃキツかった。あともうちよつとだった気がしないでもないけどさ」

「そう…まあ、そういう理由なら、仕方がないから許してあげるわ」

「ありがとな。…あーダメだな。いろんなこと話したかったのに、いざ会ってみると何を話せばいいのかわかんねえや。…あつ、そうだな、まずはお疲れ様。この国を守ってくれてありがとう」

「あなたとの約束なもの。守るに決まってるじゃない」

「あとは…ダメだな、こんなことも出てこないなんてな…」

シエーラ、この150年でわかつたんだ。俺は君を愛している。いや、君以外愛せないんだ。だから結婚してくれないか？」

「ダメよ」

「ええ!?!?なんで!?!?」

「あなたねえ…自分の肉体年齢を考えてみなさい」

「あつ…なら、5年くらい後なら?」

「その時はもちろんOKを出すわ。でも、プロポーズをするのなら、次はもつとロマンチックにしてよ。じゃなきゃOKしないわよ?…というか、私でいいの?…こんな見た目だけど中身は249歳なのよ?」

「それを言ったら、俺だって同じくらい年寄りさ。あと、すみません。次はもつとちやんと考えてプロポーズします…」

「なら良いわ。あ、あと、今日からあなたには私の養子として一緒に暮らしてもらいます。今決めました。拒否権はありません」

「いや良いけどさ、アレキウス家から文句とかでない?」

「大丈夫よ。もし渋つても皇帝とか最高司祭の権力を使ってなんとかするから。それに、そんなことは起こらないと思うわ。だって、皇帝代理兼最高司祭の養子にもらえるのよ?」

「それもそうだな。なら大丈夫か」

「それじゃあ、今日から一緒に暮らしましょ」

「ああ!」

設定集（なお、本編に関わるとは言っていない）

## 2回目の転生     デイラドー商会

・レマーノで4・5番目に大きな商会。主人公くんが当主の時はマックスで6番目だった。つまり、だんだんと成長している。ちなみに主人公くんが継いだときは、レマーノに商会が100個あるのならその95番目くらいのところ（実際はもっと商会があるから、500番目とかそんなくらい。要は主人公くんめっちゃ頑張った）

・社員は基本孤児を育てたやつら。経費削減のため。

・基本なんでも取り扱ってた。ただ、社員が拾ってきた孤児だったため、奴隷とかそういう系のはやめてた。それは今でも受け継がれる。あと、主人公くんの知識チートが微妙に入った商品もある（基本娯楽品）でも、そんなにしっかりと覚えていたわけじゃないから、基本どこか間違ってる。例えば、トランプを作ったらカードが少ないとか。

・社員達は主人公くんのこと大好き。主人公くんもそれなり愛していた（シエーラに言った愛せるのはうんぬんは女として）現在は、主人公が拾ってきた孤児が拾ってきた孤児が運営しているけど、自分を拾った人達が主人公くんのことを褒めまくってたので半分信仰みたいな感じになってる。

・一般人や貴族からはかなり良い印象を持たれてる。一般人の理由は、娯楽を提供してくれてるってのもあるけど、1番は孤児がいなくなったから。逆に貴族は娯楽を提供してくれるってのが大きい。

・奴隷商人とかからは嫌われてる。理由はもちろん、自分達が商品にする孤児を持ってかれてるから。

・78歳で死亡

## 3回目の転生     ロマン鍛冶屋

・規模的にはそんなに大きくない。数打ちなんかはせず、依頼されてきたものだけを打つ。

・製作したものはかなりの出来だが、依頼で言われていないところ

に必ず欠点がある。決してワザとではない。それは、武器にある場合もあるし、値段（国家予算並み、みたいな）とかそういうところに現れる場合もある。なお、完璧なもの（完璧なものと言わず、ちゃんと言つていく。「完璧なもの」と頼むと具体的に言えと返される）を頼むと「は？そんなの作れるわけないじゃん」と言われる。

・達人とかそういう人達に愛されてた。そういう人達をみて買ってくるが、使いこなせず「クソじゃねえーか！」とクレームを入れてくるヤツもそれなりにいた。

・弟子の人数は3人。そいつらも欠点のあるやつしか作れない。後継者に選ばれなかったヤツらも、支店として他の都市で鍛冶屋をしている。

・主人公くん、50歳くらいで後を継がせ、隠居を始める。が、1人が寂しくなり、孤児を拾ってきて養子にした。商会の時とは違って、仕事とかとは全く関係なかったため、こっちの方がちゃんと愛してた。ちなみに、その養子の名前がマールデルなんてことがあったりなかったり：養子はパパ大好きっ子。具体的には、転生後でも、主人公くんが自然体で話してるのを10分くらい聞けば、もしかしたらパパなんじゃ？と疑えて、1時間聞けば、パパでしょ（確信）となるくらい大好き。なお、取り繕って話していても2時間で気づける。ヤンデレではない。

・遺産はそこそこ残した。4分の1は弟子に、残りは養子に行った。

・67歳で死亡



## 第9話

シエーラの養子になってから3年くらい経った。この3年間では、フアナリス兵団を作り始めたこと以外は特にこれと言ったことはなかった。

最近ではパルテビアのシンドバッドがダンジョンを攻略したという噂をよく聞くようになった。：うん、『シンドバッドの冒険』始まつてるね：でもなあ、シンドバッドの冒険の方はあんま読んでなかったしなあ：原作の方はまだなんとなく覚えてるんだけど、シンドバッドの方はあんまりなあ：まあ、とりあえず放置安定かな？

あ、そういえば最近噂になったことはもう一つあるんだった。マリアデル商会という奴隷商の奴隷が、親のために尽くす子のように働きとても素晴らしいのだとか。で、その当主の名前はマーデルと言うのだとか。いやあ、あの子がちゃんとやっていけるようで良かったよ。それに、少しづつだけど、だんだんと奴隷たちの扱いも良くなっているから、そこら辺も感謝しないかね。

：え？マリアデル商会にフアナリスが居るから交渉して来い：？  
なんで!?？今までそんなことなかったじゃん！他の人とかが行つてたよね!?？：そろそろ働かせないといろいろと不味い？というかあなたが言い始めたことなんだから働け?：はい。

はい、そんなこんなでやってきました『特別行政区』リア・ヴェニス島』：でかいね!あつ!あんなところに、パイナップルみたいなパイナップルの串売りがある!ひ、一つくらい買って食べても怒られんだろ：う、美味い!あ、あともう一本：いい、いやダメだ。俺は働きに来たんだ。観光に来たんじゃない!あ!あそこには賭博場があるう!行きたいい!：そうだ、帰りに寄ろう。ちゃんと働いた後なら怒られんだろ。怒られないよね?

ハアハア、なかなか強敵だったぜ、リア・ヴェニス島。まさかここまで心惹かれるものがおおいとはな…だが！俺は勝ったぞ！やつと着いた！

えーと、ここがマリアデル商会であつてるよね？まあ、とりあえず入ってみるか…

「お待ちしておりました。私は当主の秘書をしているキールと申します。では、こちらへ。当主がお待ちです」

「ああ、よろしく頼むよ」

☒コンコン☒

「マーデル様、最高司祭様の使いの方をお連れしました」

「良いわ。入りなさい」

「失礼します。こちらです。では、私はこれで。何かありましたらお呼びください」

「ええ、ありがとうね、キール」

「では、失礼します」

「私は、最高司祭様の代理として交渉に参りました、ムー・アレキウスと申します。本日は、お忙しい中、時間を用意して頂き感謝します」

「いえいえ、最高司祭様の命令とあればいつでも。それにしても、とてもお若いですね？」

「ハハ、それは今回の交渉内容に理由がありました…」

…では、そちらがファナリスの奴隷を差し出す代わりに、こちらは通常の販売額の3倍の額で買うということですよ？

「ええ、構いませんよ。…まだ時間がありますね。そうですね…せつかくなのでプライベートなお話でもしませんか？」

「プライベートな話…ですか…ああ、最高司祭様はあなたに感謝していましたよ。あなたのおかげで奴隷の扱いが良くなった、と」

「それは嬉しいですね…」

…あら、もうこんな時間になってしまいましたね…最後につかぬことをお伺いしたいのですが、ロマニ（主人公くんの前世の名前）という名の鍛冶屋を知っていますか？」

「い、いえ、知りませんよ？」

「そうですか…実は、その人が私の育ての親なのですが、あなたの話し方があの人にとても、いえ、ほとんど同じと言えるほど似て…そういうえば、あなたは13歳らしいですね。あの人が死んでしまったのも13年前なんですよ。…いやー、すごい偶然ですね？」

「ほ、本当ですね…」

「本当に何も知りませんか？」

「……………ゴメンね？流石に『前世の義父です』なんて言っても頭おかしい人だと思われれないと思ったからさ…良く頑張ってるね、マーデル」

「…本当にお父さんなの？」

「俺がロマニだよ」

「会いたかったよお！わたし、わたし、とつても頑張ったんだよ…お父さんが奴隷の扱いをどうにかしようとしたのは知ってたから、できるだけ良くしようと思って…」

「ああ、本当に良く頑張ったね。ありがとうね」

「うん！お父さん！」

「じゃあ、俺はもう行くよ」

「…また来てくれる？」

「ああ、また来るさ」

「またね、お父さん。」

「またな、マーデル。」

## 第10話

最近、バルバッド国王のラシッド王が来た。内容自体は特にこれと言ったことのない普通の外交だったのだが、その中でラシッド王がぼろつと漏らした「ナーポリアで面白い少年がいた」という言葉が気になった。まあ、別にフアナリス関係でもなかったのでその場にいたわけじゃなかったし、そこまで気にしているわけじゃないんだけどね？ おそらくシンドバッドのことなんだろうけど、だからといって何かできるわけでもないしなあ？ 強いて言うなら殺しておくことくらい？ でもなあ、それをするとかグノシユタツトの依代で詰むだろうし、シンドバッドの冒険をあんまし覚えてないのが怖いんだよなあ…『実は世界救ってました！』とかあつた日にはどうしようもないし…やつぱり放置しかないかなあ？

そんなことを考えたりもした日から1ヶ月くらいが経った。ラシッド王が言っていたのは予想通りシンドバッドのことっぽいことがわかった。というのも、ナーポリアの円形劇場で迷宮攻略者の少年が、実際に金属器を使って演劇をやっていると噂になっているからだ。というか、実際に行ってきた人達が「雪に雷が反射して星のようだった」みたいな具体的な話をするのだ。金持ちは大体ナーポリアに行った。

まあ、シンドバッド云々はどうでもいい。さして重要なことじゃない。そう！ 重要なのは『雪に雷が反射して星のようだった』という部分だ!!？

え？ 全然重要じゃなくない、だって？ そんなわけないじゃん！ 重要も重要、最重要だよ！ だってカッコいいじゃん！ それに、ロマンチックなことでできそうじゃない？ プロポーズに使えそうじゃん…

り、理由なんてどうでも良い！ とりあえず、保管されていた金属器の能力を確認しよう。マルコシアスの能力は…炎を纏った氷柱（以下『炎氷柱』）の作成と欺瞞を燃やして凍らせることか。で、ビムの方は…死体を操る…か。…ロマン…チツク？

待って!??これでどうやってロマンチックなことをやれって言うんだ!何?めっちゃちっさい炎氷柱でも作って空に散りばめれば良いの?

違うよ!俺がやりたいのは複数の金属器を組み合わせて、なんかカッコいいことがしたいんだよ!一つだけ使ってやるんじや意味ないんだよ!

いったいどうすれば……あつ!そうだ、ダンジョンに行こう。  
足りないんなら増やせば良いんじゃない!

「という事でダンジョンに行きたいですけど、ダンジョン生やしてくれたりしませんか?シエヘラザード様」

「どういうことよ。急に来たと思ったら、ダンジョンを生やして……あと、シエヘラザード様はやめて。鳥肌が立ったわ」

「どういうことも何も、そういうことだよ。カッコいいことがしたい。それ以外に理由があるかい!??」

「いると思うわよ?というか歳を考えなさい歳を。あなた何歳だと思ってるの?」

「で、でも!何歳になったとしても精神はいつまでも男の子なんですぅー!」

「だから、その精神がジジイだって言ってるんじゃない……ハア、仕方ないわね。今回だけよ?」

「ありがとう、シエーラ!愛してる!!?」

「でも、私は皇帝とかの仕事があつてついていけないから、1人で行ってもらうことになるけどそれでもいい?」

「えっ……うん、まあ、大丈夫だと思う」  
「ハア……ホントなんでこんな人のことを好きになっちゃったんでしよう……」

そんな感じで、ダンジョンに行けることになった。

「これは……第20迷宮 プラソンね。じゃあ、私は予定が詰まってるから行くわね」

「ああ、ありがとう、シエーラ」

うーん、緊張するなあ。初めてだね、1人で攻略っていうのは。まあ、頑張ろう。落ち着いて、慎重にな。

神さま、ロマンチックなことができる力を持つジンがいるようにしておいてください！お願いします！何もしませんが！

## 第11話

長く苦しい戦いだっただけ…

N K T

いやー、大迫力な冒険でしたね。それでいて感動的でもあるなんて  
やつはダンジョンって最高だな！  
…Y D S

え？そんな話知らない、だって？仕方ないなあ、しょうがないから  
少しかだけ話してあげるよ。そうだね、俺的にはこのダンジョンに眠っ  
ていた

ジン プルソンが（自分で奏でた）壮大な音楽と共に親指を立てな  
がら金属に宿っていったところは涙無しではいられなかったね。え  
？絶対にそんなのなかっただろ、だって？…なぜバレたし。ハア、本  
当はダンジョン内に何故か流れていた一音楽のリズムに合わせて進  
むダンジョン《クリプト・オブ・ネクロダンサーみたいな感じ》だっ  
た。リズムに合わなかった場合、トラップが作動したり、迷宮生物に  
攻撃しても何故かダメージが入らなかったりした。まあ、最初の方は  
戸惑ったけど、慣れてきたら案外楽しかった。あと、宝物庫でプルソ  
ンにダンジョン内での行動の評価を言われた。ちなみに、「筋は良い  
ね。あとは突然のことにも対処できるようになれば満点だよ。うん、  
合格だね」と言われた。…え？宝物庫に着いても宿ってくれないこと  
もあんの!?？ま、まあ、宿ってくれたんだしいいか…

それで、肝心な能力はつと。えーと？音を操れるのとその音を媒介  
にして多少精神に働きかけられる？…どうやったらカツコよく使え  
るの？何？プロポーズするとき精神に干渉して感動し易くでもす  
れば良いの？いやだよ、そんなことするの。

…仕方ない、なんとか使えそうなマルコシアスの能力を使ってでき  
ることを考えるか。うーん、とりあえず雪みたいな感じで降らせる？  
でもなあ、炎を纏っちゃってるから、火の粉が降ってきてるみたい  
しか見えないんだよなあ。

…逆に氷の中に炎を入れることってできないのかな？炎の光が氷  
で反射して結構綺麗に見える気がするんだけど…そうだな、とりあえ

ず試してみるか。…あつ、できた。案外簡単にできたな。てか綺麗だね。あとはこれをどれだけ小さくできるかだけど…おつ、これも結構簡単な。大きさは…砂くらいでいいかな？よし！一回試してみるか。…うん、綺麗だけど痛いっていうか当たりまくって変な感じがするね。とりあえず量を減らしてみよ。…あー、これでもやっぱ当たるのが気になるなあ。できるかわからないけど当たらないように降らせてみる？…おつ、できた。いいねいいね、綺麗だし、当たらないから気にならない。これならいい感じになるんじゃない？

…この氷を使って指輪とか作れたりしないかな？リングはどつかで作ってもらおうとして、こう宝石の部分をこれでね？ダイヤモンドみたいな感じにしてさ。結構良さそうじゃない？…まあ、まずはやらなくちゃ意味ないし、試してみるか。…むっず！何これ、全然上手くいかないんですけど！形自体はそれっぽくなるんだけど、全然美しくない…磨いてみる？どうやって？磨けるものなんて…あつ、プルソンの能力が使えたりしないかな？こう、振動とかを使ってさ。まっ、ダメでもともと、トライ&amp;amp;エラーだよ！…うーん、さつきよりは綺麗になった気もするけど、ほんのちよつとだけだからなあ…まあ、15歳になるまで1年以上あるし、コツコツと頑張っていくか！

…そういえば、氷の中に炎を入れたりできるんだし、炎だけとか氷だけとやってできないのかな？…無理っぽい？どう頑張っても絶対にほんの少しは残っちゃうし、マルコシアスの能力は氷と炎を同時に出す能力ってことなのかな？

まあ、とりあえず帰るか！そういうや今回はどんくらい時間がかかったんだろう？俺の体感では、ダンジョン内にいたのは3時間くらいだったけど、どんくらいズレがあんのかな？流石に年単位はやめてほしいなあ…



## 第12話

ついにこの日がきた。今日は、レーム全体で革命祭という祭りが行われている。名前の通り、俺たちが起こした革命が成功したことを祝う祭りなのだが、現在ではそんな理由などほとんど忘れて、騒ぎたいからやっているだけになっている。まあ、そんな風になっただけでも、一応は革命が成功したことを祝っているのだからそこはいいんだ。革命が俺たちが一緒に行動するようになった理由なんだし、そこらへんは考えないかね？

とりあえず、プロポーズする時間は決めてあるし、シエーラの予定が空いていることも確認した。場所ももう決めてあるし、指輪も納得いく物が用意できた。演出だって、今日までいっぱい練習して、無意識にでもやれるようになったはずだ。なのになんでもこうも緊張するかなあ！大丈夫大丈夫って自分を安心させようとしても、めっちゃ不安になってくるし！正直ダンジョンを攻略する時よりも緊張するんだけど。

よ、よし！もう一回確認しよう！まずは全身魔装してお姫様抱っこで予定の場所まで連れて行く。そしたらマルコシアスの能力で雪みたいにした氷で包んだ炎を降らせる。そしていろいろ言っ、指輪を渡す。OKOK、イメトレ完了！…ああ、不安になるう。

っと、時間だ。覚悟を決めろよ、俺。頑張れ！

「シエーラ、今の時間大丈夫？」

「ええ、祭りでやらなきゃいけない仕事も全部終わったし、今日もう暇だけど…こんな時間にどうしたの？」

「とりあえず何も言わないで、俺と一緒に来てくれないか？」

「良いけど…どうしたの？」

「あとで話すからさ。じゃあ、行くよー！」

その言葉と共に全身魔装をする。そして、シエーラをお姫様抱っこする。

「ええっ!??な、何してるの!??ユリウス！ちよ、ちよつと！」

俺は何も言わず空へと歩いて行く。

「ちよ、ちよっと!!?何か言つてよ!!?」

「前にも一度だけこんなことがあったよな」

「そう言いながらも俺は空中をゆったりとしたスピードで歩いていく。」

「えっ?…うん、たしか、ビムのダンジョンのときだっけ?」

「ああ、あの時はゾンビに追われていたりして、あんまりゆっくりできなかつたけどさ」

「う、うん、あの時も急にこんなことするから驚いちゃつて」

「嫌か?」

「ふふ、嫌なわけではないじゃない」

「それは…嬉しいな。シエーラはいつも俺を気にしてくれていたよな。ビムに行った時も、働き詰めだった俺を心配したからだっただろう?」

「ふふ、どうだったかしらね?もう昔のことすぎて忘れちゃったわ」

「シエーラがそう言うんなら、そういうことにしとくよ。…感謝してる。ありがとな」

「どういたしまして」

「つと、見えて来たな」

「あの崖のこと?」

「秘密だよ。すぐわかるけどな」

「ふふ、なら教えてくれても良いじゃない」

「いや、こういうのは秘密にしといた方がそれっぽいだろう?つと、よし、シエーラ、下ろすよ?」

「ええ、大丈夫よ。それで、わざわざこんな…わあ、綺麗だ。これは…雪?いえ、微かに光っている?これは…マルコシアスの能力?」

「おお、大正解だよ。よくわかったね」

「だってあなたが時々練習していたから…」

「あれ?見られてた?気をつけてたんだけどな」

「ふふ、私をなめないことね。魔法ってすごいものよ?」

「ああ、魔法か…そこまで考えてなかつた。つと、この話はここまでに

して：シエーラ、俺たちが初めて出会ったときを覚えてるか？」

「たしか、あなたが家出して来たんだっけ？それで、私がいた森にやってきたのよね」

「ああ、そこで5年後にまた来てって言われてさ。それで5年後に行った時にマルコシアスのダンジョンを攻略したんだ。まあ、あれを攻略って言うのかは謎だけどさ」

「ふふ、あの時のあなた、カッコよかったわよ？あなたが熱く語る姿、今でも思い出せるわ」

「そうやってまつすぐ言われると、ちよつと恥ずかしいな。えーと、それで、マルコシアスから貰った力を使って革命を起こしたんだ。その時もいろいろと支えてくれてさ。いや、その時だけじゃない。いつだってそうさ。シエーラが支えてくれたから俺はやってこれたんだと思う。そういう風に支えてもらって過ごしてるうちに、いつのまにか一緒にいるのが当たり前になってたんだ。…でも、違ってた。転生して、会えなくなっただけじゃなかったんだ。一緒に入れることは当たり前じゃないんだって。」

それでもさ！俺は少しでも長く一緒にいたい。これからも一緒に時間を重ねていきたい。

だから！俺と結婚してほしい！」

その言葉と共に結婚指輪を差し出す。頼む！お願いだ！受け取ってくれ!!？

「……………はい！私をあなたの隣にいさせてください！」

ああ、今まで生きてきてよかった。本当にそう思う。

## 第13話

シエーラと結婚してからあと少しで1ヶ月が経つ。まあ、結婚したと言っても、公的な何かをしたってわけじゃないから、気持ち的に結婚したってだけなんだけどね？そりゃあ、シエーラは皇帝兼最高司祭だからね。そんな人と結婚とか無理無理。それに、ユリウスだった時の俺とシエーラを題材にした恋物語の本が売れまくってるからね。国民達の中では、シエーラはユリウスのことを愛してるものだってことになってるからね。それなのに、(中身は同じだとしても)違うやつと結婚したとか発表したら暴動が起きますよ。

ま、まあ、大事なのは精神的なことだから！他の人に認識されてなくても俺は良いから！悲しくなんてないから！それに、シエーラが指輪をつけてくれるだけで俺は満足だから！

っと、違う違う。結婚してもうすぐ1ヶ月だからさ、何か渡したいんだよね。装身具は既に貴族どもが渡したやつが大量にあるから、花束とかが良いのかな？…花束…花束ねえ？花束と言ったら、やっぱりバラかな？…そーいや、バラって数とかにも意味があるんだっけ？というかこの世界にも花言葉とかってあるのかな？…うん、とりあえず大きめの商会にでも行ってみるか！

あつたよ！とりあえず買うか。

えーと、バラのページはつと。おつあつたあつた。えーとなになに…ふむふむ。なるほどね。この中なら「あなたの思いやり、励ましに感謝します」っていう意味の8本かな？もつと数増やせば良いのもあるけど、流石にプロポーズでもないのに、最初から99本とかはね…つと、決まったんなら早速予約してくるか。当日でもいいけど、なかつたりしたら嫌だしね。

—当日—

よし、準備OKだな。シエーラも仕事が終わったみたいだし、行く

か！

「シエーラ、少しいいか？」

「ええ、大丈夫よ。どうかしたの？」

「ああ、今日で結婚して1ヶ月になるからな。今までの感謝も込めて、これを渡そうと思つてな。いつもありがとう」

「これは…バラが8本？たしか花言葉は『あなたの思いやり、励ましに感謝します』だったかしら？」

「あ、知ってたか…」

「これでも、200年以上生きているからね。そういうことを覚えたりもするわよ」

「え…俺も同じくらい生きてるはずなのに、今回用意しようとするまで知らなかつたんだけど…」

「それはそうよ。あなたは男で、私は女でしょう？同性同士で話す内容は違うわ」

「…そういうもんなのかな？」

「そういうものよ」

「そうなのかな？…それでその、喜んでもらえたら嬉しいよ」

「ふふ、嬉しいに決まつてるじゃない。あなたが私のためを思つてやってくれることならなんだって嬉しいわ。…それに、私だっていつも感謝しているのよ？そうね…ムー、少しかがんでもらえる？」

「え？わかつたけど…」

言われた通りかがむとキスをされた。

え??????

え??????

「ふふ、正真正銘のファーストキスよ。

…いつもありがとうね」

その時の彼女の笑顔は、ただひたすらに美しかった。

## 第14話

結婚してからだいたい10年経った。この10年で、ヴァサゴ、バルバトス、アンドロマリウスという3つのダンジョンを攻略した。：別に、シエーラに出してもらった訳じゃないよ？なぜかダンジョンがレマーノ周辺にできちゃったから、国民に被害が出て困るし攻略したんだ。：まあ、十中八九ジュダルがやったんだろうけど。

ああ、そういうえば最近バルバツドの王宮が燃えたらしい。あと、それが原因でラシツド王が死んでしまったのだとか。

普通なら、そこまで気にする必要のないことなのだが、生憎俺には原作の記憶がある。まあ、すでに重要な部分以外は忘れてしまったが、ここは覚えている。たしか、アリババがバルバツドから出て行く原因だったはずだ。ということは、そろそろ原作も始まるんじゃないかな？

：まあ、だからどうしたって話なんだけどね？そもそも原作からして、だいたいのキャラが生存してたはずだから、変える必要があんまりないんだよね。まあ、シエーラには死んで欲しくないから、なんとか生きていたいと思わせられるよう頑張ってるけど。

なんやかんやあって、5年くらい経った。バルバツドでは革命だとか、焔の傘下に入れられたりだとかいろいろあったみたいだが、こっちでは特に何もなかった。強いてあげるとすれば、魔法道具を持った盗賊による被害が出てることかな。

ちなみに今日は闘技場コロッセオに来ている。普段から遊戦びに来たりしているが、今日は別だ。珍しくシエーラが闘技場に行きたいと言ったから、護衛という程で来ているのだ。あっ、他に護衛はいません。シエーラを守る上で邪魔にしかならないからね！

あっ、アリババくんが勝った！あの絶体絶命の状況から、諦めずに逆転するなんて凄いな！

それにしても

「珍しいな、シエーラが闘技場に来たって言うなんて」

「少し気になる気配がしてね」

「ルフの導きつてやつか？俺にはよくわかんないなあ…」

「あなたと初めて会った時もあったのよ？」

「えっ!!？そうだったの!!？初めて聞いたよ!!？」

「まあ、今初めて言ったからね」

「なんで言ってくれなかったの!!？」

「だって、わざわざ言うほどのことじゃないじゃない」

「たしかに…そう言われるとそうだな」

「この話はもう終わり！あの時あなたと会えたのが重要なのであって、それがルフの導きのおかげだろうとどうでもいいじゃない！」

「…それもそうだな。結果としてシエーラと会えたんだし、そんなのどうでもいいか」

「そういえば、あなたはよくここにくるのよね」

「まあ、日頃から実戦をしとかないと体が鈍るからな。別にファナリス兵団のヤツらとやるのでもいいんだが、やっぱどつかで加減しちゃうからな。ここでなら、そういう加減とか無しでやれる。それに、多少やりすぎても大丈夫だしな」

「もう、あんまり無茶しないでよ？心配するんだから…」

「無茶はしないさ。それに、俺だって不安なんだ。もし何かあった時に、俺の力不足でシエーラを守れなかったらって」

「私だってマジよ？自分のことくらい、自分で守れるわ」

「わかってる…わかってるんだけどさ、それでも不安になっちゃうんだ」

「仕方ないわね、守られてあげる。だから、そんな顔しないで？私は笑ってるあなたが好きなの。まあ、どんなあなたも好きだけどね？」

「ハハ、ならシエーラも笑ってくれ。俺も笑ってるお前が好きだ。もちろん、どんなお前も好きだけぜ？」

「ふふ、わかったわ」

「ありがとう、シエーラ」

## 第15話

今日は闘技場に來ている。理由はもちろんアリババくんと戦うためだ。原作キャラですよ？そりゃあ、話したりしたいです。1週間前に来た時は、シエーラもいたので自重したけど、今日はすっかり仕事を終わらせて來ているので無問題だ。…流石にまだいるよね？

ということ、闘技場内に入ってきた。…俺が入ってくるだけでキヤーキヤー言うのやめない？いや、カッコつけて魅せる戦い方をした結果、レーム最高の剣士だと言われているのは知ってるよ？でもさ、ほぼ毎週來てるんだし、そろそろ慣れようよ。

つと、そんなことは置いといて、今日アリババくんは出るのかな？…おつ、いたいた。というか、今日はトーナメント式か…このメンバーなら、アリババくんが優勝しそうだな。…うん、優勝したヤツにエキシビションマッチとして、戦いを仕掛けよう。ダイジョーブダイジョーブ、ちゃんと運営には言つとく。たぶん許可も出る。なんとつて、レーム最高の剣士だからね！つと、アリババくんを持ち金全部…は後でシエーラに怒られるのが怖いから半分くらい賭けとこ。倍率は…あー、やつぱ低いなあ。そりゃあ、なんだかんだで1週間生き残ってるんだし当たり前か…

よし！アリババくんが優勝したな。何歳になつても賭けつてのは興奮するなあ。つといけないいけない、早く行かないと終わっちゃう。えーと、今から下に降りてつてやつたら間に合わなさそうだな…ということ、飛び降りるか！そっちの方がカッコ良さそうだし！トウツ!!？

「やあ、アリババくん。優勝おめでとう」

「あ、あなたは？」

「俺はレーム最高の剣士 ムー・アレキウス。今から君には俺と戦つてもらおう。ああ、安心してくれ。別に君が負けたからつて優勝が取り消しになつたりはしない。所謂エキシビションマッチつてやつだ」





な。首を狙って。ああ、やっぱ避けられたか。

「いいねいいね！もつと頑張るんだ！」

「オラア！」

：そろそろかな？これ以上長引かせてもダレるだけだしね。やっぱ最後はカッコよく締めたいよね！ここは：超圧縮居合斬りかな。

説明しよう！超圧縮居合斬りとは、フアナリスの身体能力をフル活用して、納刀・抜刀を超高速で行う技のことだ！え？鞘ないしそもそも刀じゃないじゃん、だって？別に納刀・抜刀って言っても、実際は指で剣を抑えて、力を溜めた状態で、指を外して一気に抜き放つっただけだし。ただカッコつけてそう呼んでるだけで、特に名前に意味とかないし…

そ、そんなことはどうでもいいんだよ！重要なのはカッコいいかどうかだから！

っと、とりあえず、さつきみたいに隙を作らせて、攻撃する！こうすれば、アリババくんは後ろに跳ぶはずだ。よし！跳んだな！今回は避けられると思うなよ！

「必殺！超圧縮居合斬り！」

「なっ！！？」

「(カッコ) いい勝負だったよ、アリババくん」

ここで起き上がってくれたりしたら、超盛り上がるんだけどなあ：あつ、やっぱダメか。まあ、しゃーないしゃーない。すでに大歓声だし、これで満足しとくか。

ホントにナイスファイトだったよ！アリババくん！

## 第16話

アリババくんと初めて戦ってから8ヶ月くらいが経った。この間、アリババくんに剣術を教えたり、テイトスをマグノシユタツトに送ったりした。アリババくんに剣術を教えたのは、とりあえず主人公を鍛えておけば良い方向に行くつしよって言う安易な考えからだ。べ、別に、原作キャラと喋りたいとかいう下心はありませんよ?…ホントだよ!

テイトスをマグノシユタツトに送ったのは、魔法道具による被害が深刻になってきているからだ。で、その原因と思われるマグノシユタツトに、調査員としてシエーラの分身体を送ったってわけだ。テイトスを見るとなんか引つかかるのは、原作キャラってことなのかな?今までもシエーラの分身体が男になったことはあったけど、こんな風に引つかかるのは初めてなんだよなあ…ああ、あと、シエーラが、最近テイトスのルフがよく荒れるって言ってた。なんでも、マルガッ子と一緒に暮らし始めてから増え始めたのだとか。…まあ、おそらくは、これからも生きていたって思っちゃったんだろうなあ…俺は良いと思うよ?シエーラにしわ寄せが来ないのなら。例えば、シエーラの代わりに来世のマジになるとか、そういうのじゃなければ。

………アツ!!?思い…出した!そうじゃん、テイトスじゃん!ヤバイじゃん!えっ!?もう女の子と暮らし始めてんの?ヤバくない?そろそろ戦争始まっちゃうじゃん!と、とりあえず、戦争回避のためにシエーラを説得しないと!

『…タツトは、マグノシユタツトの属州になりなさい』

ヤバイヤバイヤバイヤバイ!どうしよう、もう宣戦布告が始まっちゃってるよ!?ど、どうしよう。とりあえず、シエーラを落ち着かせなきゃ!このまま、戦争になっちゃうのはガチでヤバイ!

「シエーラ、入るよ!」

「えっ!??ムー!??ちよ、ちよつと待つて!」

「シエーラ、モガメット候と話しながらでいいから聞いて。子っつい

うのは、いずれ自立して、親離れするものなんだ。それは、どんな生き物だつて変わらない。獣だつて、鳥だつて、もちろん人間だつて。だからさ、許してやってあげないか？ テイトスに自分の意思ができたつていうのなら、それを怒るんじゃないかと、祝つてあげようよ。それが、親の役目だと思ふんだよ。ね、シエーラ」

「…冷静じゃなかったわ。ありがとう、ムー。お陰で落ち着いたわ」  
『すみません、モガメット候。 テイトスに何かあったと思つて、少し冷静じゃなかったようです。 テイトスについては、 テイトスの意思に任せます。 明日、遣いを送るので、それまでにどうするか決めておいてください』

「これで良い？」

「ああ、話を聞いてくれてありがとう。俺にできることがあつたら、なんでも言つてくれ」

「じゃあ、明日までにマグノシユタットに向かつてね」

「えっ？」

「さつき、モガメット候に言つたじゃない。明日、遣いをおくるつて。ここからマグノシユタットまで1日で行くなんて、ファナリスか金属器使いにしかできないわ。 そうすると、適任なのはあなたくらいしかないじゃない。 だからよろしくね、ムー」

「……………ハイ」

ええ……………

## 第17話

ということやってきました、マグノシユタツト！

いや、まさかホントに来ることになるとは思わなかった…

別に、疲れたってわけじゃないよ？マグノシユタツトの関所までは魔装でひとつ飛びだったし、そこからもそこまで距離があつたわけじゃないし。それに、道だって案内の人がいたから迷つたりはしなかつたし。

ま、まあ、そんなことはいいんだよ！そう、大事なものはマグノシユタツトに来たつてこと。じゃあ、さつそくモガメツト候のところへ！

「失礼する。レーム帝国 最高司祭様の代理として来た ムー・アレキウスだ。今日は時間を取ってもらい感謝する」

「礼には及ばん。それで、結論から言うが…」

「待ってくれ。できれば、本人の口から聞かせてくれないか？でなければ、報告するときには少々問題が起きる可能性があるのではな」

「了解した。ではテイトス」

「はい。…ボクは、この国に残りたい。たった1年とちよつとしか生きてないけど、それでも、大切な人ができたんだ。だから、その人たちとずっと一緒に生きていきたい」

「…そうか、わかつた。…1つだけ言わせてくれ。シエヘラザード様はお前を自分の子として愛していた。それだけは知っておいてくれ。では、私はこれで。…テイトス、残りの時間、悔いの残らないようにしろよ」

「待ってくれ、ムー！ここでなら、魔導の粹を集めれば、この体は生き長らえるらしいんだ！だから！学院を卒業したら、シエヘラザード様に会いに行つてもいいかな？」

「…もちろんだ！って、俺個人としては言いたいんだがな。そうなつてくると、少々問題が出てくる。だから、それについても話さなければならぬ。モガメツト候、時間に余裕は？」

「問題ない」

「…あつ、テイトス、少し席を外してくれないか？これから話す内容に、少々機密事項があつてな」

「わかった。ありがとう、ムー」

「それで、話とはなんだね？」

「…テイトスのことだ。あの子とあの子が言っていた大切な人というのを、できるだけ円満に別れさせてやってほしい」

「…どういうことだ？」

「…体が大丈夫でも、あの子はもう生きられないんだ。あの子のルフがもう限界なんだ。長くても一月、短いとあと数日で崩壊してしまう。そうすれば、テイトスはルフへ還り、自我が消えてしまう。これはもう…どうにもできないんだ…」

「…そうか。わかった。できるだけ努力しよう」

「…感謝する。すまない」

「全ての魔導師は、私の息子同然だ。その子のためというのなら、私はなんだってしよう」

「本当にありがとう。では、私はもう行くよ。では、失礼する」

ハア、ホントに嫌になるよ……なんとかできなかつたのかな…

「ムー、さっきの話は本当なのか？」

「なっ!? テイトス!? まさか、聞いていたのか!?」

「ああ、聞いていたよ。そうか、そうなのか…」

「いや、その…」

「すまない、今は一人にさせてくれ…」

マジかあ…

## 第18話

はい、ということと特に問題もなくレマーノに帰ってきました。

え？ テイトスはどうした、だつて？

そりやあ置いてきましたよ。ああいう時は、ほつといた方がいい。追って話そうとしても、話が余計にややこしくなるだけだからね。

それに、テイトスはシェーラと通信できる魔法道具を持っている。だから、何か聞きたいことがあればシェーラに直接聞けるし、それができないのなら、テイトスの想いはその程度だったってことだ。というか、2人はちゃんと話しあった方がいいと思う。いや、マジで。上司と部下としてではなく、親子として。そうすれば、テイトスも気持ちの整理がつくんじやないかなあ：

あと、もう一つ理由を言うとなれば、煌帝国と戦争が始まりそうだったからだ。マグノシユタットが（レーム以外となら）どこと戦争しようとするでもいいけど、在国中に戦争になって、レームに帰れなくなるのか嫌だからね。モガメツト候のあの感じなら、何か策があるみたいだし、テイトスもたぶん大丈夫だろう。…大丈夫だよな？

報告を済ませてきました。

うん、やつぱテイトスに話を聞かれたことを怒られました。で、罰として戦争に関わらないギリギリの位置でマグノシユタットと煌帝国の戦争の行方を見てこいと。…キツくない？ たしかにフアナリスは目も良いけど、それでも5キロくらいまでしかハッキリと見えないよ？ えっ？ それでも行くの？

マジかあ…

ハア、仕方ない。元はと言えば俺が原因なんだし、頑張るかあ…

まあ、それはそれとして、1人は暇だから、誰か連れて行くのかな？ フアナリス兵団のヤツらは…ダメだな、戦闘してるところとか見たら、絶対突っ込んでく。うーん…あつ、そうだ！ アリババくん連れてこー！ なんか前にマグノシユタットに友達がいるとか言ってたし、ちようど良いでしょ！…それに、アリババくんならレーム人じやない

し、たとえ問題を起こしたとしても、しらを切れるし…

「ということ、行くぞ、アリババくん！」

「チョツ!??待って!?!?どういふこと!?!??ムーさん!?!??」

「どういふことも何も、マグノシユタツトに行くつてただけだよ?いやー、マグノシユタツトと煌帝国が戦争するみたいだからね。マグノシユタツトに友達がいるんでしょ?もしかしたら、助けられるかもしれないよ?」

「ツー……行きます。ちよつと待つててください。今から準備してきます」

「ん?あつ、焦らなくてもいいよ。まだ余裕あるし。別に今すぐ戦争が始まるつてわけじゃないからね。そうだね…明日の昼出発するから、それまでに荷物をまとめたり、挨拶しといてね」

「わかりました!」

つと、俺も会いに行かないとね。もしかしたら、もう会えなくなつちやうかもしれないんだから。

久しぶりに来たな、ここ。普段はあんまり行かないように、というか行くなつて言われてるからね。…でも、今日は特別だ。だつて、これで最後になつちやうかもしれないんだから。最後くらい、直接シエーラと会いたいからね。

「久しぶり…で、いいのかな?それとも、さつきぶりかな?ああ、無理はしないで。聞いているだけでいいからさ。」

今日は、別れを言いに来た。もしかしたら、もう会えないかもしれないからな。

今まで、本当にありがとう。俺は、シエーラがいたからやつてこれた。シエーラには、感謝してもしきれないよ。

…ダメだな、言葉がでてこない。言おうと思つてたこといっぱいあつたはずんだけどなあ…

……………別れたく…ないよ。いつまでも側にいてほしい。



もつと話したいし、行きたい場所だってある。なのに……どうして……  
どうして……」

「……ユリ……ウス……愛し……て……いる……わ……」

「ッ!? ……俺も愛しているよ。……そろそろ行くよ。またな、  
シエーラ」

「……また……ね……」

俺は、シエーラの神殿から出て行く。これ以上ここにいと、出て  
行けなくなってしまう気がするから。

彼が出て行った後の神殿には、999本の青色に輝く薔薇が咲いて  
いたという。

## 第19話

とうちやーく!

ということで、戦争は始まつてるかなあ?

始まつて…ないっぽいね!仕方ない、アリババくと話でもして待つかあ…

—1日目—

「アリババくん、友達のところに行きたいんなら、行っても良いよ?行けるのかは知らないけど」

「行きませんかよ?ほら、ピンチのところに見れた方がカッコいいじゃないですか」

「ハハッ、それもそうだな!だけど、それをするのなら、多少は余裕を持って動いた方がいいぞ。間に合わないとかヤバイからな」

「そうですね。なら、戦争が始まったら行くとします」

「ああ、そうするといい」

—2日目—

「始まらないっすねえ。どのくらいに始まるかとかわかってわかってるんですか?」

「わかってたらこんなところで暇してたりはしないよ。まあ、俺の予想としては明後日だと思うけどな」

「へー、どうしてそう思うんですか?」

「なんとなくだ!」

「えっ!?」

「まあ、嘘だけだな。ちゃんとした理由を言うよ。…交渉するとなると、煌帝国ならおそらく皇子か皇女が交渉人だろう。で、煌帝国の前皇帝が死んだのが半年前だ。皇帝が死んだとなれば、普通皇族は国へ帰るだろう。それで、皇族が煌帝国に集まるまでだいたい1ヶ月かかるだろう。そこから1ヶ月は葬式とか継承とか色々としなきゃ行けない。そして、軍での行軍となれば4ヶ月はかかる。それをもっと深

く考えていくと明後日くらいになるんだよ。まあ、あくまでもなんの滞りもなく行けばだけど」

「なるほど…じゃあ、あと少しですね」

「まあ、俺は戦争が終わるまでここで見てなきや行けないんだけどな」  
「ハハッ、頑張ってください」

— 5日目 —

「始まらないですねー。もしかして、戦争なんて起きないんじゃないんですか?」

「最近の動きから、煌帝国がマグノシユタツトを狙ってるのはわかってるんだ。それに、モガメツト候の感じからして、煌帝国が攻めてきても徹底抗戦するだろう。だから、たぶん戦争は起きると思うんだけどなあ…」

— 10日目 —

やっと始まったあー!なんでこんなにズレてるの!?!? アクシデントでも起きて、予想よりも長い時間かかったのかなあ?

まあ、始まったんならもういいやー!アリババくんはもう行っちゃったし、本格的に暇だあ!

ちなみに、現在はマグノシユタツト側が有利です。

なにあの魔法道具、ヤバくない?なんかぶつといビームみたいなのが切られたよ?あつ、コードみたいなのが切られた。んー?あれ、マグノシユタツト側のヤツじゃね?仲間割れかな?

あーでも、煌帝国側も少しずつだけ進んで行ってるなあ。どうなるんだろ、これ?

ん?なんだあれ?砂の…巨人?うわっ!??あれもビームみたいなの出してるし!ヤバくない?…あれ?でも、誰にも当たってなくない?威嚇射撃かな?それとも、ノーエイムなだけ?

あつ、砂の巨人が崩れた。煌帝国の兵士達だけ遠くに流されてく…  
どういう…あー、そう言うことね。煌帝国の兵士達の心を挫こうと。  
でもなあ…煌帝国の兵士ってかなり忠誠心が高いヤツが多いから

なあ…それで本当に心が折れるかな？

あつ、煌帝国側の金属器使いが全身魔装した。これは…逆転あるかな？うわー、めっちゃガンガン進んでるよ。これはマグノシユタツト、ヤバイかな？

あつ、アリババくんが全身魔装で飛び出した。ってことはあそこらへんにアラジンがいるのかな？

結構拮抗してんなあ。このままだと、長期間続くことになんのかなあ…

なんだあれ。マグノシユタツトから黒いなんかが戦場に向かってる？

んー????  
????なんかこっちにも向かってきてない？

## 第20話

うーん、どうしよう。あきらかにレームを攻撃しようとしてるっばいけど、現状ホントにそうだと見える証拠がないからなあ…

：仕方ない、距離を維持しつつレーム領内に戻るか。それで、レーム領内に入ってきたら敵意ありつてことで倒せばいいよね？

まあ、とりあえず電話みたいなルフの瞳でシェーラに報告しつつ、一旦帰るか！

レーム領内に入ったけどアイツらは…：入ってきたね！よし！シェーラにもちゃんと許可もらったし倒すか！ということ、マルコシア：いや、アイツらあきらかに生物じゃないし、とりあえずバルバトスにしとくか。

「狩猟と高潔の精霊よ。汝に命ず。我が身に纏え　我が身に宿れ。我が身を大いなる魔神と化せ…

バルバトス!!!」

しゃあ！喰らえ！なんか悪魔っぽいの！超強力な衝撃波連打だあ!!?

正直今イライラしてんだよ！長くても5日だと思ってたから、連れてきたのアリババくん1人だったけど、10日も連続で同じ人と話してるなんて俺には無理だよ!!?ルフの瞳はあったけど、基本シェーラは働いてるから話せないし、なんかこう、別れの挨拶をした人と話すのって気不味くない？俺は気不味い。だからあんま話せなかつたし：要するに暇だったんだよ！ていうか、そんなことはどうでもいい！とりあえず死ねえ！

…あれ？案外簡単に斬り刻め：なんか再生してるう!!??

…：…：…あー、たぶんこいつ原作に出てたな。テイトスを見た時みたいな感じがする。見た目的にたぶん敵側だろうな。となると、おそらくアルサーメンと関係ある。で、さっきなにかが集まってくる様に再生してたから、たぶんルフでできてるんじゃないかな？アルサーメンが関わってるルフとなると、まず間違いなく黒いルフだろうな。

……あつ、思い出した。黒いジンか、こいつら。それなら、アンドロマリウスだな。アンドロマリウスには黒いルフを白いルフに戻す能力があるし、黒いルフでできたこいつらにはよく効くだろ。

「変革と独善の精霊よ。汝に命ず。我が身に纏え 我が身に宿れ。我が身を大いなる魔神と化せ…」

「アンドロマリウス!!!」

よし、終わった終わった。途中で黒いジンが追加で来たりもしたけど、特に苦勞することもなく倒せた。まあ、黒いジンを斬りつけて戻すだけだったしね。それくらい朝飯前ですよ。

……あれ？　そういえばこれ、ヤバいのでは？　マグノシユタツトから黒いジンが出てきたってことは、ほぼ確実に黒の神イル・イラーが出てくるでしょ？　……うん、援軍呼んどくか。そいつらにこころ辺を守らせとけば、俺も対処しに行ける。

「シエーラ、ファナリス兵団をこっちに寄越してくれない？」

『もう送っているわ』

「え？」

『魔法で見えていたもの。あなたのことだから、どうせ本体を倒しに行くんでしよう？』

「…え？　それなら俺、ここにいる必要なかったことない？」

『そんなことないわよ？　現にあなたがそこにいなければ、さっきのヤツらに攻め込まれていたじゃない』

「たしかにそうなんだけど、なんかモヤモヤするなあ…。ハア、まあ、行ってくるよ」

『ふふ、頑張つてね』

「ああ、任せてくれ！」

あつ、ロウロウたちが来たな。

「団長！」

「よく来てくれた、お前たち」

「団長に呼ばれば、何時何処にいたってすぐに駆けつけますよ！　そ

れで、俺たちはどうすれば?。」

「お前たちには、マグノシユタツトからくる敵の対処してもらおう。ヤツらは、倒したところですがすぐに再生する。だから、国境にある結界を利用して、ヤツらが入ってこれないように戦ってくれ。4人1組で対処しろ。俺はヤツらの本体を叩きに行く。任せたぞ!。」

「了解です!。」

よし、行くか!

## 第21話

…おかしくない？なんでマグノシユタツトに近づけば近づくほど黒いジンが減っていくの？こういうのって、近づくほど増えていくもんじゃないの？レームの近くにいた時は6体出て来たのに、さつきは1体だけだったよ？別に、数が減った分だけ強くなったってわけでもないし。

…あつ、依り代出てきた。なるほどね、あれを守るためにこつちへの攻撃が弱まったってわけか。

…つて、ヤベエじゃん！依り代が出てきたつてことは、あとちよつとで黒の神降りてきちゃうじゃん！急がないと！

やっと着いた！とりあえずは状況把握だ。つて、煌の連中いるじゃん。まあ、戦争してたんだから当たり前つちや当たり前か。つと、それは置いといて…

「アリババくん！あれはいつたいなんなんだ!?？」

「えっ!?？ムーさん、なんでここに!?？」

「あの黒いヤツがレームに攻撃してきたからだ！それで、あれはいつたいなんなんだ!?？」

「えーと、とりあえずあれを壊さないと世界がヤバいんです！あの上にいるヤツが降りてきたら、世界が滅んじやうらしくつて！」

「ふむ、あれを壊せばいいんだな！了解した！」

「あつ、えつと、気をつけてください！アイツ、スツゲー硬い防壁を張ってるんすよ！」

「なるほど、ありがとう、アリババくん！」

いやー、知ってること聞くつて変な感じするよね。でも、ここで一応聞いとかなないと、なんでアイツ知ってんだつてなつちやうからね。理由作りは大切。つと、いけないいけない。煌の連中とも話しとかないと。えーと、煌なら…

「おい！練 紅炎！」



「お前は…ムー・アレキウスか！」

「非常に癩だが、協力してやる！感謝しろ！」

「アイツっ!!? 炎兄に対してあんなっ!!?」

「感謝はせん！協力するなら、とつととしろ！」

「わかっている！お前の方こそ、ぼさつとしてるんじゃないぞ！」

ああ言われたし、早速倒していくかなあ。てかヤベエな。黒いジン、ぱつと見、千体くらいいるじゃん。あー、極大魔法撃ちてえ…。でもなあ、それしちゃうと、魔力がマゴイ一気になくなるからなあ。

…あつ、アラジンいるじゃん。それなら、なんの問題もないな。空を晴れさせれば、太陽の光で魔力回復できるし。

「その魔導師っぽい子！あの雲を吹き飛ばすことはできるか？」

「えっ!!? 僕!!? たぶんできると思うけど…」

「なら良い！」

よーし、極大魔法ブツパするぞお。ふへへへへ…

「変革と独善の精霊よ。汝が王に力を集わせ、闇を晴らす大いなる閃光をもたらせ!!」

極大魔法『アドラス・フレッシュユ革命の極光』

極大魔法によって現れた小さな太陽の光が黒いジン達を包み込んでいく。光に包み込まれたジンは、だんだんと浄化されていき、白いルフに戻っていく。それは、俺の周辺に留まらず、500メートルくらい離れていた、依り代の周りにいたものにまで及んだ。

ふー、気持ちいいいいいい!!?

千体くらいいたものの、8割くらいを浄化できた。いやー、やっぱり気持ち良いね、めっちゃいるのを一気に消し去るの。つと、魔力回復しないと。

「魔導師の少年！雲を吹き飛ばしてくれ！」

「…あつ！はい！わかったよ！」

よし、アラジンが雲を消し飛ばしてくれた。これで1分くらい待てば、もう一回極大魔法を撃てるかな？

よーし、頑張るぞお！

## 第22話

よし、魔力マゴイが良い感じにたまってきたぞお。もうそろそろ極大魔法の2発目が撃てるな。

あつ、アリババくんと紅炎の野郎が同時に極大魔法を撃とうとしてる。えーと、ああ、魔法つて同系統のを同時に使うと強くなるんだっけ。それを極大魔法でやろうとしてるのかな？

おつ、アリババくんが依り代に極大魔法を叩き込んだ。んー、でも防壁の方はビクともしてないな。このままだと、先にアリババくんの魔力が切れそ…あつ、紅炎の極大魔法で出てきた炎の龍が、アリババくんの極大魔法で出てきた巨人の剣と合体した！何あれカツケエ！剣が龍の顔みたいになってる！

…合体技か。ありだな。

あつ！依り代の防壁にヒビが入ってる！良いぞー！頑張れー！

あー、防壁割れずに終わっちゃった…。まあ、依り代イルイライと黒の神をつなぐ柱みたいなのが折れてるし、十分かな？

…ハッ!? あんだけヒビがはいってるのなら、バルバトスでもうー押しすれば割れるのでは?…よし、やってみるか。

ということだ魔装しました。よし、やってやるぞお！

「狩猟と高潔の精霊よ。汝が王に力を集わせ、全てを貫く大いなる衝撃をもたらせ!!」

極大魔法『バルバトスの鋭槍剣』

かってえ!? なんつー硬さだよ！例えるなら、コンクリートを素手で殴ってるみたいだ！まあ、今の俺なら、コンクリートくらい素手でも余裕でぶっ壊せるけど。ていうか、アリババくん、こんな硬いのにヒビ入れたのかよ!? 凄いな！俺も負けてられないぜ！

ウオオオオオオ!!?

「ラッシャアアア!!?」

割れタア！ヨッシャア！これで後は攻めるだ…け…?あれ?なんか、黒いジン達が集まってるといふか、なんだあの手は?火山の火を消してる?それだけじゃない、さっきまで燃え続けて



## 第23話

まあ、何はともあれ戦わないと生き残れないからね。(ルフを奪われて死ぬとか明らかにヤバそうだから)まずは死なないことを念頭において頑張るぞお!...それはそれとして、顔がたくさんの触手みたいなのでできてるのか、見れば見るほど○トウル○神話に出てきそうだな。

よし!じゃあ行く...ちよつ?!?お前それはダメじゃない?!?たしかに、黒の神を地上に墮とせばお前の勝ちだけど、それを初っ端からやるのはどうなの?!?

あつ、アリババくんが突っ込んだ。つて、アリババの方を向いた?!?まさかさつきのはブラフ?...なるほど、先程までとは違って、知能があるみたいだな。うん、無闇に突っ込むのはやめよう。

とりあえず、アリババくんには悪いけど観察に徹させてもらうか。相手のことを知らなきや対策を立てられないからね。つと、ついでに魔装をアンドロマリウスに変えて魔力を回復しとくか。

あつ、アリババくんの攻撃が防がれた。え?さつき割ったばつかの防壁また張りやがった?ふざけんな。

つて、アリババくんが叩き飛ばされた?!?...つて、今度は紅炎のやつが突っ込んだか。アイツはこういう時に焦って突っ込むような男じゃないと思うし、何かあるのか?とりあえず、何が起こっても対応できる位置はいるか。

というか、腕の動きが速いな。魔装してるヤツと同じくらいの速度のヤツが大量にあるってかなりキツイな。うん、できるだけ近づかないように戦おう。

あつ、普通に掴まれた。つて、腕は切れた?アリババくんの攻撃は防がれたのに?さつきとの違いって何かあるか?...?攻撃したところが、手か腕かだけだな...。もしかして、手でしか防壁を張れないのか?...うん、試してみないことにはわからないな。...てか、アイツの手に触れられると、魔装剥がされるのか。ヤバいな。

つと、そろそろ働くか。つて、煌の皇女が怒りに任せて攻撃しに行

きやがった。あつ、でも攻撃が良い感じに効いてる。んー、やっぱ手でしか防壁を張れないみたいだな。腹には思いつきり攻撃が入ってる。これはもう確定だと考えていいだろうな。まあ、見てれば誰でもわかるだろうけど。

「手だ!!? あいつが『防壁』を張るのも ルフを奪う攻撃をするのも手の平だけだ!!? 他の場所を攻撃すれば効いている…。一気に倒す!!?!!? みんな力を貸しておくれ!!?!!?」

ほら、アラジンもわかってたし、みんなもわかってたでしょ。

「闇雲に動くな。紅明! おまえが指揮をとれ!」

「承知しました 転送します。紅覇、紅玉、白瑛殿、アレキウス殿!!?」

「はい!!?!!?!!?」

「今回だけだからな!」

ホントに今回だけだよ? 緊急事態だから、指揮下に入ってやるだけだからね? へえ、この光の枠の中に入ると攻撃しやすい位置に転送してくれるのか。つと、いけないいけない。煌のヤツらも戦ってるし、俺も働かないと。

「変革と独善の精霊よ。汝が王に力を集わせ、闇を晴らす大いなる閃光をもたらせ!!」

極大魔法『アドラス・フェレツシユ革命の極光』!!?!!?」

なつ!!? 効いてない!!? どうしてだよ!!? 黒いルフでできてんだろ!!? とつとと白いルフに変換され…あつ、まさかアイツ、白いルフに変わった瞬間に吸収して黒いルフに塗り替えてんのか? なにそれ、頭おかしいんじゃないの?

つと、極大魔法がさらに2つ追加で撃たれたな。これなら!

やったk…つとあぶねえ! フラグを立てるところだったぜ…

「や…やったかつ…!!?」

アリババくうん!!? これは生き残ってますね。間違いない。

「う…海からルフを奪い取って…大きくなってる!!?!!?」

「こいつ、でかくなったぞ!!?」

「海からルフを奪ったんだ! あいつは、この世界のあらゆるものからルフを奪って強くなれるんだ!!?」

「そんなのに…勝てるのかよ…!?? 僕らはもう極大魔法も撃てない…『魔装』も…ギリギリだ…!!?」

ヤベエな。絶体絶命じゃん。魔装については、まだ余裕があるけど、極大魔法は俺も撃てないよ。どうすれば…

「勝てるはずだ…。『アルマトラン』の時みたいに、今度もきつと…。『アルマトラン』でも同じことが起きたんだ。今の『依り代』とは形が全然違ってたけど…なぜだろう？」

とにかくその時はソロモン王と、『ジン』になった72人の『眷属』たちが『依り代』を次々とやつつけたんだ。

だからここにいるみんなが力を合わせれば…きつとまたあいつを倒せるはずさ!!?!!?」

そう…:…:…:。ポジタイプに考えよう。なんとかなるさ！

ツ!!? アイツ、さらに速くなってやがる!!? アラジンとその近くにいた煌のヤツが地面に叩きつけられた!!?」

ツ!!? こつちに来やがったよ!!? クツソ!!? 速え!!? 迎撃が間に合わねえ!!? 全方向から来るんじゃないやねえよ! あつ…

痛つてええええ! 下半身に触れられたか。神経が直接空気に触れるって痛いっすね。

つと、どうなつ…:ヤベエ!!? 半分以上やられてるじゃん!

あつ、アイツ黒の神を墮とそうとしてやがる。どうにかしないと。ツ!!? 足が!!? クソツ! アリババくん、頼む! 止めてくれ!

ああ、ダメだ、墮とされる…。止められない…。

「「やめ…:やめろおおお!!?!!?」」

## 第24話

バララク・サイカ

「雷光剣!!?!!?」

雷撃ツ!!? いったい誰がツ!!?

「シンドバッドさん!!?!!?」

本当なのか、アリババくん!!?ということは、ヤツの後ろに控えるあの軍勢は七海連合の金属器使い達か!!?金属器使いは…ふむ、ぱつと見シンドバッドを入れて5人か。眷属もそれぞれ1人づつと。ありがてえ…

それにしても、カッコいい登場の仕方しやがって。…絶対タイミング計ってただろ。

あつ、眷属達が同化した。俺はもう動けないから、俺の分まで頑張ってね!

「いつまでサボっている、ムー・アレキウス」

「ん?ああ、練 紅炎か。いやー、どこからどう見ても戦闘不能じゃん?だから、サボってるってわけじゃないんだよ?」

「それなら治してやる。だからとつとお前も戦いに行け」

「あ、マジで?助かる」

「感謝しろ」

「感謝はしないさ。それより、お前だけサボったりするなよ?」  
「そんなことするわけないだろう」

うん、紅炎って案外話しやすいわ。

まあ、足も治してもらったし、働きに行きますか!つと、その前に、アンドロマリウスが効かなかったし、バルバトスに変えてから行くか。

よし、準備完了!じゃあ行くか!

現在は…眷属の人達が頑張ってるみたいだな。ていうかアイツ、球体の時と同じように、体全体を覆うように防壁を張ってやがる。まあ、球体の時のよりは脆いみたいだけど。眷属の人達の攻撃だけでヒビ入ってるし。

…よし！もう一回割ったろ。あの脆さなら、極大魔法を使わないでも破れそうだし。

ということ、行くぜえ！

…：…なんの苦勞もなく割れました。

あつ、あれはイグナティウス殿。レームからも援軍を寄越してくれたのか。

「ムー、シエヘラザード様からの伝言だ。『あとは任せた』だそうだし、  
「そうですか…。イグナティウス殿、ありがとうございます」

ツ!?？魔力マゴイが戻ってくる!?？

…：…そうか、シエーラ、それが君の選択なんだね。…：…泣いたりなんかしないさ。ああ、泣いてなんかかない。だって、それはきつと、シエーラの選択を否定することだから。

一気に決める!!？

「「「「「極大魔法!!？」「「「「「」

その声と共に13個の八芒星が現れる。そこを起点に巨大な八芒星が作り上げられていく。そして、出来上がった八芒星の中央には、シンドバッドが立っていた。

「極大魔法

バララク・インケレードサイカ  
『雷 光 滅 剣』!!？!!？』

八芒星から巨大な雷撃が放たれる。その威力は、先程シンドバッドが現れた時に放ったものとは比べものならず、100倍以上の大きさだった。そして、その雷撃が依り代へと襲いかかる。雷撃に触れた瞬間、依り代は粉々になり、あたり一帯の海は蒸発した。

全力で撃ったぞ…。13人の金属器使いが極大魔法を放ったんだ。これで倒せない敵がいてたまるか！それに…：…シエーラの最期の魔力が届かないなんて許せない。

なっ!?？やめろ！再生するな！やめてくれ！シエーラの犠牲を無駄にしないでくれ！頼む！やめろおおおお!!？



……動か……ない？ どういうことだ？ なんで苦悩しているような姿で止まり続けているんだ？

あつ、なんかアラジン達が話してる。

ふむふむ……なるほど、つまり、あれの核になっているモガメットのルフを、一粒だけ混ぜた白いルフが引き止めていて、依り代が弱ってきたことで押しとどめられるようになった、と。それで、今からアラジンがモガメットを引き戻しに行くらしい。

「ソロモンの知恵!!?!!?」

## 第25話

「ムー団長ー!!?? 団長ー!!??」

「ててて転送魔法陣でっ!!? 本国から…」

「おお送られてきてっ!!?」

「お前らには国境付近の守備を任せていたはずだろう? 落ち着け、何が送られてきたって?」

ここは覚えている。新しいマジとしてテイトスが送られてきた場面だ。見たくないなんて思う俺がいるなんてな。見ることさえしなければ、もしかしたらシエーラが転生したかもしれないと思えるなんて……。いつからこんな女々しくなったのかな。

……………覚悟、決めなきやな。

「————えっ!!?」

「ふふっ、これからもよろしくね、ムー」

なんで、なんでなんでなんで……。なんで、シエーラがここに? ……もしかして、テイトスじゃなくてシエーラが転生した? マジで?

……………なんか、恥ずかしくなってきた。いや、シエーラが生きていてくれるのはすごく嬉しいんだけど、その、さっきまで覚悟だとか泣かないようにしてたのが、なんていうか、その、ちよつと……。

…えつと、まあ、とりあえず……

「これからも全力で仕上げさせていただきます、シエヘラザード様」

「むっ……ムー、レームに帰ったら説教です」

「えっ!!?」

「ああ、後、そこにいるマルガという子はレームで預からせてもらいます」

「えつと…テイトスお兄ちゃん……なの?」

「テイトスの親の様なものです。まあ、親らしいことをしてあげられていたかはわかりませんが」

「そう…。その、テイトスお兄ちゃんは?」

「その、テイトスは……もう……」

「そっか……そう……なんだ……」

「ごめんなさい……」

あれから2ヶ月が経った。

その間に、マグノシユタツトの扱いについてや、個人的に練 紅炎に会いに行ったりでいろいろとあったりもしたが、最近ではアラジンがアルマトランに関して話す会談についての仕事で忙しい。まあ、それでも2ヶ月前よりはだいぶ仕事が少なくなってきたのだが。

それで今日は、シエーラに呼び出されている。理由はまだ伝えられていないが、仕事に関してではないらしい。いったいなんなんだ……？

「失礼します、シエヘラザード様」

「どうぞ、ムー」

「それで、今日どうして呼び出したんだ？」

「今日はあなたにお願いがあつてね。聞いてくれる、ムー？いえ、ユリウス？」

「ユリウスとして？まあ、俺にできることならやるが……」

「そう、ありがとうね、ユリウス」

「それで、俺はいつたい何をすれば……」

「子どもを作りましょう」

「えっ？……すまない、聞き間違えた様だ。もう一回言ってくれないか？」

「だから、子どもを作りましょうと言っているのよ」

「………いやいやいや！妊娠中どうするんだよ！シエーラがやらなきゃいけない仕事とかたくさんあるし、1ヶ月後には会談だってあるんだよ……？」

「それなら問題ないわ。分身体を使えばいいもの」

「ツ……たしかに……。というか、なんで急にそんなことを言い出したんだ？」

「私は2ヶ月前に死んで生まれ変わったわ」

「ああ、そうだな」

「その結果、今の私の体は私の肉と骨から作った分身体じゃなくなつた。普通の人と同じ体になったの。それに、レームも安定してきたでしょ？だから、もう我慢しなくてもいっかなって…」

「できた子どもはどうするんだ？対外的には、シエーラは結婚してないことになってるんだ。そのシエーラに子どもができたなんて、周りが黙っちゃいないぞ」

「私の分身体ということにするわ。それなら問題ないでしょ？…さつきからなんで産まない方向に持っていこうとするの？…もしかして…私と子どもを作るの…いや？」

「そんなわけないだろ!!？ただ、その…覚悟が決まらなかつたんだ。でも、もう大丈夫だ。今、覚悟が決まったよ。作ろうか、子ども」

「ええ！」

## 第26話

さてさてやってきました会谈会場！まあ、今日は俺たち　フアナリス兵団は主役じゃないんだけどね。あくまで主役は煌とシンドリアだから。俺たちは、練　紅炎の個人的な友人として参加するだけだから。だから、同盟関係に問題があったりはしないんだよ。いいね？

えっ？シエーラとの子作りはどうなったんだ、だって？

い、言わせんなよ恥ずかしい。まあ、一つ言えることがあるとすれば、今日来るシエーラは分身体だったことかな！

あつ、そういうえば、会谈の会場には金属器を持ってけないらしいんだよね。まあ、フアナリスの身体能力があれば基本的に大丈夫だとは思うけど、一応金属器になつていない剣を持ってきた。というのも、シンドリアがヤンバラを連れて来るみたいだからね。ヤンバラの気功剣を素手で受けるのは流石にキツイから、隠しておいた前世での最高傑作を持ってきました。そう、前世でのコネをフル活用して素材を用意した人生最後の一本。お値段にすると、小さな国なら一つくらい建てれそうな額になるやつ。そこが欠点判定されたっぽくって、剣自体には欠点がない、シンプルに硬くて鋭いを極めた剣。

いやー、作つておいてよかった。少しでも転生した時の助けになればいいなって思つて作つたけど、正解だったね。：まあ、自分の全てを注ぎ込んだものを作りたいてって気持ち少しはあつたりもしたんだけどね。

え？なんでそんなのがあるのに今まで使つてなかったんだ、だって？いや、使つてはいたよ？ただ、生物由来の素材が使つてあるから金属器にならなかっただけで。まあ、短剣でもない剣を二本も持つてくとか、頭のおかしいやつ認定を受けかねなくて、たまにしか持ち出さなかったつてのもあるけど。

ま、まあ！そんなことはいいんだよ！今重要なのは、アラジンが話すアルマトランについてだからーいやー楽しみだなあ。どんな話をするんだろう。まあ、覚えてないだけで、マンガで読んだことはあるんだろうけど。

つと、着いたな。じゃあ、金属器を預けて会場に入るか。

原作22巻のファナリス兵団が入ってくるころから24巻の最後までほとんど一緒なのでカット。

ふむ：なかなか面白い話だったな。向最初の人生のこうにいた時の俺はこの話をどう思ったのかな？まあ、それはそれとして、停戦協定か。悪くない話だな。レームは、レームに住む人々自身の力で育っていければそれでいい。周りの事も気にするが、あくまでそれが一番だ。だから停戦だけだって言うのなら、俺は受けても良いと思うけど…。俺もなんだかんだで200年以上生きてるけど、こういうのは苦手だからなあ…。皇帝の時も書類仕事が多くて、外交は基本的に部下に任せてたし。

ま、まあ、それは良いんだよ。それで、停戦協定か…。うん、とりあえず相談だな。

「いかがなさいますか、シエヘラザード様」

「そうね：私は「それは名案だ」

シンドバッドか…。あの顔、絶対ヤバいこと考えてるよ。というかアイツなんなんだろうね、ホント。時々、これから起こることを知ってるんじゃないかって行動するからね。お前ホントにこの世界の間？俺と同じ、転生者だったりしない？

：ほーら、またヤバいことしたあ。なんでアルサーメンを利用して煌帝国を追い詰めて、戦力を下げつつ内政にまで踏み込むなんて発想が出てくるの？

うわあ、シンドバッドか練 紅炎、どっちが世界の王としてふさわしいか言い合ってるよ。あつ、アリババくんが紅炎に突っ込んでった。勇氣あるなあ。

……？違う木の匂い？それも、切られてから何年も経ったようなもの？この島には木造の建物はなかったはずだが…。上か………？

「あれは…煌帝国のマジ？？」

『……』

「あーあ、バレちゃったか。もつと派手に登場して驚かせてやろうと思ってたのに。まあ、そこそこ驚いてたし、それでよしとするか！久しぶりだなアラジン！えらく退屈な話だったが、やっと俺も仲間に入れてくれるんだろ？面白くなってるきそうだなあ！」

「マズイな…。金属器がない状態だと、大規模な魔法を使われると対処しきれない。」

「幸い、今はアラジン達に興味があるみたいだし、すぐに魔法を撃つてくるってことはないと思うが…。」

「ん？兵達が入ってきた？…なっ!?？練 玉艶が殺された!?? ……平常心平常心。落ち着いて行動することが大切だ。何やろうが、焦ってたら失敗するぞ。 ……よし、落ち着いた。とりあえずは、煌帝国の動きを見よう。それからでも遅くない筈だ。」

「あつ、煌帝国の話が終わりそ…」

「ツ!??黒い…雷…?眩しツ!??」

「なんとも…ない…のか?シエーラは…無事そうだな。」

「シエヘラザード様、大丈夫ですか?」

「ええ、問題ないわ、ムー。狙ったのは周りの海だったようだしね」

「しかし、これではこの会談も…」

「そうね。私達も、アラジンに協定参加の意思だけ言って帰りましょう」

「了解です」

## 第27話

国際同盟ができて3年が経った。今ではほとんど、というか、現在確認できる国はレーム以外 全て国際同盟に入った。その結果、国際同盟の4つの法律が世界のルールになった。その内容って言うのが、

- ・ 奴隷制の廃止
- ・ 兵役制の廃止
- ・ 国家間の移住の自由
- ・ 世界統一貨幣の制定 だった。

これには国際同盟に参加していないレームでも影響を受けざるを得なかった。というのも、兵を減らさなければ「攻めてくるんじゃないか」と、まともに貿易してくれなかったし、奴隷を減らさなければ「奴隷なんてものが未だにいる国が作ったものなど信用できない」と、足元を見られたからだ。だから、まずは兵を減らした。その結果 浮いた軍事費で奴隷を解放した。それを少しずつ繰り返していき、最終的に兵は国の治安を維持するのに必要な分まで減らし、奴隷は全員解放した。まあ、奴隷を解放したって言っても、ほとんどの人は奴隷の時の職場に再就職したけどな。これも、奴隷の扱いを良くしてくれた、マーデルのおかげだな。あつ、兵士達にはもちろん、新しい就職先を用意していたよ。

まあ、奴隷や兵のことを置いといても、他国からはあまりいい風には見られてない。これは、仕方ないことでもある。国際同盟に入っている国は運営負担金を払わなければ貿易できないところを、レームはそれを払わずに貿易をしているんだからな。その代わりと言ってはなんだが、レームは貿易品にはバカ高い関税がかけられてるんだけどな。まあ、相手が得してる部分だけを見て文句を言うのが人間だからな。『隣の芝生は青く見える』ってヤツだ。

政治的な話はこころ辺にしといてプライベートな話に行こうか。

まあ、やっぱり一番はシェーラとの子どもが生まれたことかな。で、その子のことについてなんだけど、うーん、なんて言うか、ティ



トスの記憶を持つてるみたいなんだよね。その所為かはわからないけど、成長が速いんだ。今は実際には2歳のはずなのに、見た目的には10歳くらいにしか見えないんだよ。それに、容姿もテイトスにそっくりなんだ。だから、初めは別の名前があったんだけど、最近はずいぶんテイトスと呼んでる。

最近のテイトスは、もっぱらレームで保護していたマルガちゃんのところに行っている。最初に再会した時のマルガちゃんの喜びようはすごくて、それまでは、なんでテイトスの記憶を持つてるのかとか考えてたけど、それだけでもういいかなって。これが知らないヤツの記憶とかなら別だけど、テイトスならよっぽどのことがない限り大丈夫だろうし。

ああ、でも、2人目は理由がある程度わかるまではやめておこうってことになっている。せめて誰の記憶を持つて生まれるのかわからないと怖くて仕方がないからね。これでレームに恨みを持つてるヤツでも生まれてきたらしやれにならないからね。

他に言わなきゃいけないことは……ないな！この3年、国内では移民問題なんかが起きるわ、国際同盟は入れ入れとうるさいわ。その所為で、ほぼずつと働いてたからなあ……。まっ、そんな感じで、あんまりプライベートな時間ってのがなかったんだよね。……少しでも問題が減ってくれると嬉しいなあ。